し、廣東廣西湖南を統領す。

汨艦部――旗は深紅色。前祖馬超興、後祖姚必達の名を書し、印は四角形。家后堂、蓮章群等の字を刻し、雲南四川を統領す。

洪勦部――旗は白色。前祖胡德帝、後祖李式地の名を書し、印は平行四角形。參太堂、錦廂群の字を刻し、河南安徽を統領す。

泰勦部――旗は綠色。前祖李式開、後祖林永超の名を書し、印は圓形。宏化堂、得興群の字を刻し、江西浙江を統領す。

（右の旗は洪帮前期組織では、各領袖の職務を標示し出入に之を掲げた。即ち老大は黃旗を用る一切の軍機要務を司る。老二は藍旗、軍糧及財政庶務を司る。老三は白旗、軍の出動、進退一切を掌る。老四は黑旗、全山の勤惰を監察し、票布口號、步哨通報、一切の防務事務を掌る。老五は紅旗、全帮の功過を察し、論功賞奬、活殺與奪の權を握る。さうして老大一名。老二二名。老三四名。老四六名老五一名と定め、尊卑長幼を分たず、先進後入も凡べて兄弟分とし、職員は一般の選擧に據つたが、後期に至つて階級を嚴にし、老二、老四を廢し、老六、老九、老么を加へたこと後述の如し。

最も重要な事務は入會式である。之を開香堂（カイシャンタン）と稱し、會場は外部、中央部、內室に分ち前二部を休憩所に充て、後部の內室を紅花亭と稱し、禮拜堂に用ゐられ、正面に忠義堂と記せる横額を掲げ、左の神位を奉安する。

主神――關帝

輔神――前五祖及後五祖

旁祀――鄭君達、萬雲龍（浙江人胡得起、萬雲寺に入り、長老となり、萬雲龍と號す。清室に反抗して死すといはれてゐる）鄭玉蘭、陳近南、天佑洪。

入會は舊會員の紹介を要し、苟も覆清の志ある者は、上下の區別なく何人も入會を許さる。

以上を見ると、凡てが廣東好みで、開場の模樣などチーハーの大筒に彷彿たるものがある。明朝が倒壞した時、皇族は殺戮を免れるために寺に隱れた。從て再興の計畫も寺を根據とし、清室を仇とする小說的緣起が此處に仕組まれ、一轉して闇黑方面に勢力を扶植したものであらう。それには水滸思想が重大なる素因をなしてゐる。

三

哥老會は乾隆に初まつたが、同治年間髮賊平定後、曾國藩の組織した湘軍（鄉勇團）が解散され、軍事生活に慣された彼等は、再び正業に就くを欲せず、多くは哥老會に入會し賭博、强盜、鹽阿片の密賣を業とした。（鄉勇の强盜化はいつの時代にもあることで、明の太祖などは登極後、極力之が撲

滅を計つた。世が乱れると農民は自衛上自治團を組織し、盗賊の防禦に當るが、教養なき彼等は兵權を便用する中にいつしか盗賊化して仕舞ふのである。現在の紅槍會、大刀小刀會などみなそれである。又動亂後の解散兵のハケ口は大抵秘密結社に吸收される。上海戰後青紅幇の大增加は、多くは便衣隊として活動した連中である。）

哥老會の祖師は達摩大師といふことになつてゐるが、達摩大師は武藝に達し、支那拳法の祖であることから、彼等はこれをかつぎ出したのである。

初祖　達摩（姓は刹利、字は菩提。西天竺に在りては第二十八駕師。中國に於ては本會の祖となす。三月朔日聖誕、八月十五日得道）

二祖　神　光（姓名沈慧可、道號大滿禪師）

三祖　會　燦（姓慧心、大周禪師）

四祖　司　馬　英（大林禪師）

五祖　周　宏　忍（大德禪師）

六祖　盧　善　信（字は慧能、大育禪師）

七祖　圭　峯（字は恒山、大雲禪師）

八祖　羅　正　清（字は受泉、大明嘉靖二年二月十五日聖誕、七月十五日得道）

九祖　陸　清（字は應建、大澐師）

十祖　陳　單　瀛（字は益水、大醪海禪師、十月十八日聖誕、正月朔日得道）

十一祖　趙　大　官（字は悟本、道元禪師、十月十日聖誕、三月十三日得道）

十二祖　翁　德　慧（字は福明、山東東昌府聊城縣東鄉翁家莊籍、正月十八日聖誕、乾隆六年十月十日得道）

十三祖　錢　德　正（字は福齋、山東濟南府濟陽縣城內籍、二月二十日聖誕、乾隆十三年十月二十日得道）

十四祖　潘　德　林（字は福軒）

十五祖　王　降（字は相湯、八月一日得道）

十六祖　蕭　玉　德（字は隆山、山東東昌府鼓樓大街口籍、總科經承聽士出身、十二月三十日聖誕）

十七祖　王　培　玉（字藍田、直隸通州坦の人、十一月十六日聖誕、幼にして父母を失ひ、潘德林に養はれ、小爺と呼ばれてゐたが、後ち潘は彼を弟子に容れんとし、名帖に記したが師弟の禮を行はざるに先立ち、潘は死亡した。故に此會に於ては、王培玉は片足門內に入り片足門外に出づと見做されたが、後ち門外に供養して護法の小爺とした。）

右の內第七祖までは系圖を作るために强ひて空名を當て嵌めたものである。第八祖の羅正清ぼ、萬

曆三十年の進士で、天啓三年戶部尙書を拜したが、偶ま蕃兵西域を冒し、討伐困難を極め、權臣魏忠賢は羅正淸を窮境に陷害せんと欲し、彼を擧げて將としたが、羅正淸は蕃兵を擊退し、和を結んで首尾よく凱旋したので、魏忠賢はすつかり當てが脫づれ、更に賣國の行爲ありと彼を誣ひ獄に下した。まもなく蕃王入國して天書三冊を献じたが、解する者なく、已むなく羅を獄より出し、之を釋明せしめた。その後西域再び反するに及んで、羅は登台して法を說き、西域の兵を退けたが、當時台下に在つて聽聞してゐた陸淸は、羅の說法に敬服し、拜して徒弟となり、五台山に登つて修業した。陸淸は五台山に在つて修業中、三人の徒弟を入れたが、これが翁、鏡、潘の三人で、哥老會の事實上の開祖である。丁度その時、康熙帝は「護國漕運」の義士を募集したので、陸淸は三人に命じて應募せしめ、一に盡忠報國の誠を致し、二には師に代つて傳導せしめた。康熙帝は三人のうち潘德林を擧げて正統となし、祖爺のために杭州に家廟を設くることを許した。それより潘は山門を開いて廣く弟子を收めたが、翁鏡は弟子を取らず、山野に游び消息を斷つた。潘は糧米を運び、浙江から運河を往來して掠奪を防ぎ、屢々奇功を顯はし、康熙五十年、黃河の鳳臨閘に於て過方（死去）した。弟子蕭玉德はその跡を繼いで長く法燈を傳へた。以上が哥老會の緣起である。

青帮の緣起を見ると、年代は乾隆頃で、羅祖（羅正淸）は達摩大師のやうな人物になつてゐる。初め彼は募集に應じ、苗族の反亂を征服し、論功賞奬に與らず、蠻地に止つて說法してゐたが、翁、鏡、潘から入門を請願され、避けて長江に至り、葦を泛べて渡江し、杭州武陵門外、啞叭橋上の洞穴に隱れたが、後ち三人の切なる願ひを容れ道を授けた。丁度その時、朝廷は漕運護衞の士を募つてゐたので之に應ぜしめ、三人は羅祖に別れて山を下ると既に三十餘年を經過してゐた。そこで糧食運漕の任務を引受け、徒弟各一千三百二十六人を招き、運糧船一千九百九十隻半を率ひて、首尾よく公務を果した。これより盜風長く息み江上安全であつた。淸帝これを嘉みし、三人を入朝せしめ役名を賜はり、立譜を許した。之が青帮（チン）の首じまりで、青帮は祖師が淸朝を保護するといふ意味で淸帮と稱したが後ち扁を省いて青帮と稱したといふのである。哥老會が洪家と稱するのは、明室の復興を志し、洪武の年號を取つたといふ說もある。卽ち洪家は洪帮（ホンパン）、後ちに同音の紅帮（ホンパン）を用ゐてゐるのである。さうすると、此二つは祖師を同じうしながら、丸切り反對の目的に行動することになり甚だ奇異に感ぜられる。要するに、紅帮も青帮も糧米運送の護衞をなすもので、或は淸初糧米運送に當り、土匪の掠奪を禦ぐため、毒を以て毒を制する方法を採り、有力なる土匪を懷柔し保護の任に當らせたのであらう。併し彼等はもと〳〵鹽梟、土匪の集合であるから、結帮の目的は、彼等自身の忠義（利慾）を遂行するに便するためで、時の政府とは常に對立の位置にあり、臨時の收入に依て歸順するも、結局一時の現象で、常に反動的地下的存在をなしてゐたのである。

翁、鏡、潘が羅祖から道を傳へ承けたといふ啞叭橋の山下には、今でも潘安廟といふ祠があつて、羅祖の神像を傍に祀つてある。文章の上手な美男子が盜賊の守本尊とは變なわけだ、と土地の者にき

いてみると、潘安廟は初め武松廟と稱してゐたが、盜賊の信仰が多いので世間を憚り、潘安廟と改名した。いづれにせよ、運河の起點が杭州にあるところから、發祥地を此處に定めたものであらう。

翁、鍾、潘が軍功を立てゝから、公然潘安堂を設立し、徒弟を二十四字輩に分け、十大帮規を制定し、六部の役員を置いた。その後ち翁佑堂、鍾保堂を加へて三堂となつたが、その勢力到底前者に如かず、今日青紅帮（チンホンパン）を名乘る十中の八九は、皆潘安堂の票布を所持してゐる。彼等は堂號の代りに太房（ファン）、二房（アルファン）、三房（サンファン）といふ言葉を用ゐ、翁大、鍾二、潘三を一家兄弟のやうに認め、此等を總括して江淮四帮といふ。

四

六部は引見部、傳道部、掌布部、用印部、司禮部、監察部等で、引見部は入帮希望者を誘引紹介し、傳道部は仲間の規約を說明し、掌布部は契約書を作り票布、秘籍を備ふ。用印部は彼等の信不信を確めて調印し、司禮部は入帮式その他の儀式を掌り、監察部は徒黨の行動を探つて取締る。

十大帮規は初め、師を欺かず祖を滅せず、帮規を攪亂せず、福あらば同じく享け、難あらば同じく當るべし、仁義禮智信たれ、の如きものであつたが、後ちに春保山の保三に依て八個條の賞罰令に改正された。

斬罪――一、帮の秘密を漏洩する者。二、令に抗して遵はざる者。三、陣に臨んで脫退する者。四、私通奸細（みつこく）する者。五、引水帶線（ひびき）する者。六、水頭（すいとう）を呑沒（どぼつ）する者。七、同帮を侮辱する者。八、同帮の婦女に痴戲する者。

賞奬――一、帮務に忠實。二、官兵を擊退。三、出馬最も多く、四、帮務を擴張し、五、敵情を精探し、六、人を帶領すること最も多く、七、奮勇先きを爭ひ、八、同心協力する者。

二十四字輩は二十四字の系譜を作り、親分乾分の順序を明かにすること。即ち祖先崇拜ではあるが、義を以て繫がるもので血族關係ではない。その系譜は、

圓明心理大通悟覺普門開放萬象依歸羅祖眞傳佛法玄妙

の二十四字で、以前その上に十六字を加へてあつたが、翁鍾潘以來の先人が物故し歷史が遠くなつたので今はその傳を失ふ。現在青帮の徒黨數萬千を以て數へらるゝ中、圓字明字輩の如きは絕無であつて、心字理字は希れにあり、大字輩は百名に達せず、悟字覺字輩に至つては可成り多くあるが、それすら師爺、師太、師公などと尊まれてゐる。蓋しこれは親分乾兒の分界を正しくする階級制度で、圓の乾兒は必ず明字を名乘り、明字の乾分は必ず心字を名乘り、祖先に尤も近い代にある者がより多く尊まれる。

會中で尤も重大なことは、開山（カイシヤン）と開香堂（カイシヤンタン）である。開山は新頭目が一の本山を開くことであり、開香堂は新會員の入會式を行ふことである。本山には必ず山號と堂號があり、之を票布（會員證）の中央に書きあらはし、左右に水名と香名を記し、下に內外の口號、卽ち合言葉が記されてある。

堂	義	忠
龍鳳如意香	雙龍山	五湖四海水
號	外口定國	內口邦安

堂	義	正
萬年千載長壽香	春保山	五湖四海三江水
號	外口復明	內口清掃

右の文字は見識らぬ者と面會して、自家人（ツカニン）か否かを探ぐる時、「貴公にはいかなる水を飲まれるか」の問ひに對し、「不束ながら手前は五湖四海三江の水を飲む者」と答へれば、春保山であることが解り、「貴公には一爐の香を焚かれたか」の問ひに對し「不束ながら手前は龍鳳如意香を燒いた者」と答へれば、双龍山といふことが解る。內口號は山內で使ひ、外口號は他所で使ふ。後者は外帮にも通じてあるので他所でも解るのである。卽ち安といへば邦と答へ、定といへば國と答へる。正義堂の「掃清、復明」はいかにも明の遺臣らしい口吻だが、實は山主盛春山が諸生アガリで、屢々科擧（しけん）に落第して不平を起し、開山し、己れの鬱憤をあらはしたもので、實際明室に忠實なるものではない。青紅帮といふものは概してかういふもので、日本人の著書には大分高値にこれを買つてゐる。

山中には山主を初めとして老大、老三、老五、老六、老九、老么（ラオコウ）などの地位及び役割がある。老大は聖賢大爺、內八堂及外八堂大爺、一步登天大爺に分ち、聖賢は山主代理をなし、內八堂は內務を總攬し外八堂は外務を總理し、一步登天は名譽職である。

老三は金旗と銀鑾に分け、金旗は糧食金錢の出納をなし、銀鑾は入帮證、印璽などを掌る。老五は獨立せる司法權を握り、是非曲直、賞罰を正しくし、山主と雖も容喙するを得ない。老六は探偵、步哨通信をなす。老九は直接行動の任に當り、强盜殺人、私鹽販賣、擄人勒贖、賭博開帳、本山差遣の諸雜務を掌る。老么は勳功ある者、公務のために廢疾せるもの丶恩給生活である。但し老二、老四、老七、老八の缺は、二は關帝を憚り、四は死を忌み、七は女賊に讓り、八は忘八（阿呆）を忌む、或は底なき盃を漏巵（ローパ）といひ、老八（ローパ）に通ふゆゑこれを避く。

右の內山主と老五は各一人限りで其他は人數に制限がない。蓋し老九は位置極めて低く、新入者は皆之に充てらる。老九にして功ある者は老六、老三、老大に歷進或は拔擢さる。しかし實際はその中間に一人限りの老五といふ顯職があつて、此關門を通過しなければ老三、老大に進むことが出來ない。故に無名の好漢はいかに功勞があつても老六を以て出世の止りとし、最後に老么となつて恩給生活に入るのである。但し勢力ある大盜、官軍現職の軍人、巨財を投げ出して惜しまぬ者などは、一躍一步登天の大爺となる。此點は實によく考へたもので、一方には前述の如き峻嚴苛酷の處罰があり、不平を起して脫帮すれば、いつかは一度必ず生命を失ふ。故に無名の者が入帮したら最後、敵味方の

いづれに對しても、生命を失ふ危險があり、不具廢疾となつて身を終ふる者はせめてもの幸ひである。

開香堂（カイシヤンタン）は極めて嚴肅な儀式で夜半正十二時に行はれる。先づ紹介者は入帮志願人の姓名を記して山主の許に報じ置き、數十名若しくは數百名の志願者を得た後ち、山主は外八堂大爺を遣はし其事を處理せしむ。乃ち臨時に借り受けた一廟宇の正面に羅祖の像を掛け、爺、鐵、潘三主爺の位牌を置き、その前に方形の大桌子を据え、右に大片子（ダーピエンツ）（大刀）左に小噴筒（シヨウフンドン）（ピストル）中央に香爐一個、燭臺一對、線香一束を置き、山上各歴々の大爺は特に出張して正座に控え、志願者を悉く廟内に入れて門を閉づ。そこで外八堂大爺は新入帮者に命じて、淨口の後ち、祖師の位牌を三跪九拜せしめ、帮規朗讀の上、入帮志願はその本心から出たものや否やを確かめ、入帮しても決して利益にならぬことを說き示し、十分念を押した後ち、左手に線香一束を握り、右手に大片子を把つて「汝等、若し山主の命に違はず、帮規を嚴守する能はざれば、斯の如し」と一刀兩斷して衆人に示す。新入帮者は唯々として從ひ、その截斷せる線香を、一本つゞ拜領して退く。これが卽ち「萬年千載長壽香」と稱し、彼等が一生涯珍藏するもので、同時に斷頭香ともいふべき恐るべきものである。さうして前の淨口の時一口呑んだ水は、卽ち「五湖四海三江水」でこれで一ぱしの自家人（ツカニン）となつたのである。右終つて新入帮者は一大輪形に環立し、聖賢大爺の朗誦する入詩帮を謹聽して後ち、各自相互に行禮する。その行禮は洪家の抖腕式と稱し、一種特別の姿勢を用ゆ。先づ左臂を彎曲して弧形を作り、之を擧げ起して肩の

高さに至り、右手を左腕にあてて左より右に一旋し、少しく身を傾めるのである。答禮は左右の手を反對に用ゆ。上下階級の相違に依て多少の變化あり、尤も略式の禮は着物の袖口を一寸裏返して見せるのである。

五

青紅帮にはいろ〳〵面倒な作法や暗語がある。詳しくいふと行住坐臥、箸の揚げ卸し、烟草の吸ひ方、茶の飲み方、みな普通人と違つてゐる。その海底問答の如きは、日本の博徒の渡言葉と同じく頗る振つたものである。

爰に青帮の一員甲が上海を出發して長江筋へ出で、知合のない地方へ行つた時、土地の青帮に渡りを付けたいと思ふ。そこで甲は茶館に行つて掛招牌（カーショーパイ）をする。卽ち茶碗の蓋を仰向けにして碗の側面に寄せ掛けて置くと、土地の青帮乙はそれを見付け出し、甲の面前に現はれる。「お見それ申して相濟みません。老大（ラウダー）には手前内方と見受けますが、間違つたら御免下さい。」甲はこの語をきくとすぐに坐を離れて直立して身を傾める。「おめがね通り、及ばずながら祖師の靈光に浴してゐる者」「突然の詮議立て、お免し下さい。老大（ラウダー）はいづれのお身内？」「手前親分事、姓は馬と申し、名は上が德で、下が坊」卽ち馬德坊、「然らば御帮名を伺ひませう」「帮は江淮の四帮」「然らば御字名を伺ひませう」「頭

に二十一世を戴き、背に二十二世を負ひ、足に二十三世を蹈む」圓明心理の上に十六字あつたことは前にも述べた。故に二十二世は通字輩であることが解る。そこで碼頭（なちばりうつも）の所在や、三帮九代（自分の師及び引見師、傳道師等三代に溯る）の次第を問ひ糺し、確かと見た上で、乙は甲の茶代を支拂ひ、一旅館に案内して三日の間の費用を持つ。その間に歡迎博奕などの催しがある。併しかういふ風に順調にばかりゆかない。時々喧嘩腰の問答が交換される。「遠慮なくお問立てします。お仲間中には船が何艘御座るか」「一千九百九十艘半」「然らば何の旗印で御座るか」「都に進む時は百脚旗、都を出づる時は杏黃旗、朔日十五日は龍鳳旗、船首に四方大纛旗、船尾に八面威風旗」「然らば船上には何枚の板と何本の釘がある？」「板は七十二枚、謹んで地煞（ディサー）を按じ、釘は三十六本、謹んで天罡（テンワ）を按ず」「釘あつて眼無きは如何」「跳板（トンパン）」、「眼あつて釘無きは如何」「締板（チエンパン）」「然らば天上幾何の星ありや？」「言ふにや及ぶ、星は三萬六千」「然らば身に幾何の筋ありや？」「皮を剝ぐつてそれを見よ。」「然らば一刀、幾個の洞？」「一刀、唯二個の胴あるのみ、知らずや汝、幾個の心（さも）ありや、酒の肴にして貰ひたいなら、拳固の上で受けてやらうか。」

問答が此處まで進むと、もう取返へしが付かぬ。これから先きは血の雨を降らして命の遣り取りだ。併し喧嘩を望まぬ時は未前に防ぐ方法がある。即ち乙が「天上幾何の星ありや」の質問を發した時、甲はこれに對して

「仰せに恃り甚だ相濟みませんが、手前當地に參りましたのは老大の御包容を受けたき望。朝廷には掟があり、世間には禮がある。惡漢惡事を行へば、十尺の身を藏くす所がありません。若し手前に落度があると思し召さば、責むべき者ならお責めなさい。打つべき者ならお打ちなさい。我れ〳〵いづれも自家人（ツカニン）では御座らぬか。老大どうぞ怒を鎭められよ。若し長いと思はば切つて下さい。短いと思はば接いで下され。手前初めて御當地に參りました者。何も勝手が解りませんから、唯老大のお指圖を待つばかり。」

かう言つて甲は茶館のボーイに命じ、新に一碗を持ち來らしめ、双方の手に捧げて恭々しく乙に薦める。

「手前一椀の茶を買つて老大に獻じ、これから次の碼頭へ發足致します。若しお氣に入らぬ所があれば、他日手前師匠が御當地に參ります、その時までお讓り下さい。」

これは青帮の最敬禮である。かう言はれると、乙はどんなに怒つてゐても手出しが出來ない。手出しをすれば却て仲間の者から排斥される。

以上の問答は、一寸聞くと何の意味だか解からないが、よく見ると、帮の生ひ立ちの運糧船のことを語つてゐるので、地煞天罡で百八人の水滸を暗示して啖呵を切り、跳板は棧橋、締板は引綱。恐らくこれは老六老九の職分、探索、歩哨、密報、會員誘引等を象徴したものであらう。天上幾何の星以下は喧嘩口調で、斬るなら斬つて見ろといふことを面白く言ひ廻したもので、此等の文句は、凡て海

底條子といふ秘籍に記載しあり、彼等は平生暗誦して臨機應變に運用するのである。尙ほ最後に彼等が抗日テロの手先に使はれた模樣を記さう。

昨年來行はれた上海に於ける抗日テロ（中山萱生射殺、田添外二名傷害事件）は、一九三二年以來活動する兩廣福建混合體の反蔣勢力、人民政府派に依て計劃されたもので、遠くリットン卿一行闇殺計畫事件、宋子文謀殺事件、汪兆銘謀殺事件と一貫せるイデオロギーを以て行はれ、最近專ら日本人を覘つて國際紛爭を捲き起し、以て蔣政權倒壞を企つるものであり、彼等は實にいくつもの社會層を經て、末端の接觸面に三合會、青紅帮をつかつてゐる。汪兆銘事件は、王亞樵が李濟琛、陳樞銘の內意を受け、余立奎、華克之外數名と謀り、暗殺本部を香港上海等に設け、華克之は張、賀の同聲と共に南京に僞裝通信社を設け、兇手孫鳳鳴を督勵して足掛け三年に渡り蔣介石を覘ひ、果さず、最後に方針を更えて汪兆銘を槍玉にあげた。此時兇手は死亡し、數名の共謀者が捕はれたが王と華は巧みに逮捕陣を潛つて、逃走潛伏し、警察の無能を嘲り乍ら、神出鬼沒の活動を繼續してゐる。それは一年後に起つた中山射殺事件に繫がつた。この事件は同仁同義協會の會長廣東人楊文道が短銃を貯藏し、同鄕人の葉海生に命じて中山兵營を射殺した。楊文道も葉海生も三合會の帮員で、この政治的暗殺は彼等の意圖から出たものでなく、背後關係があるものと思はれたが、果してその後の萱生事件に依て、その全貌が暴露された。萱生氏を射殺した兇手は、王振聲といひ、共謀者毛永慮とは把兄弟（同帮同輩）の關係あり、毛は又趙雲鴻の徒弟であつた。趙雲鴻は李瑞五の囑託を受け、李瑞五は華克之の密命を受け、華克之は王亞樵の指導に依る。王亞樵は前に述べた通り、李濟琛、陳樞銘の出資に依て活動する暗殺總指揮官である。さうして華克之と李瑞五の關係は、金道權、朱貴生、陳恩明に依て結ばれた。李瑞五も亦相當の帮匪であらう。この暗殺は下ッ端の者に對しては、誰でも構はず日本人を一人殺せば二百元遣るといふ約束の下に行はれた。故に、趙雲鴻以下は愛國の熱誠があるわけでなく、唯二百元の金が欲しさに働いたのである。（それも數人で分配した）中山殺しの方法も同樣である。王亞樵の最高幹部張世民が朱貴生等を領導して楊文道を金で動かし、楊は乾兒の葉に命じて黑闇を通る日兵を行き當りばつたりに殺した。僅の金に目が眩れて……これが現在青紅帮三合會の傳統的土匪根性である。最近起つた田港水兵外二名の殺傷事件も、この二百元組の活躍たるや想像に難くない。

京劇概念

現在所謂支那劇と稱するものは、京戲、秦腔、崑曲、新排戲、粵戲等で、いづれも歌と鳴物が主要とする一種の歌劇である。支那には本來ドラマと稱するものはなかつたが、清末日本留學生に依て行はれた飜譯劇が支那に於けるドラマの始めで、一時流行の後を見たが結局一般の賞觀するところとな

らずして歇んだ。現在其遺物を文明劇と稱し、上海の娯樂場などで折々演ぜられるが、益々卑俗に陷り、問題とならず、此方面は一足飛に映畫、トーキーの領分に入り別趣に發達するのであらふ。それゆゑに支那劇界の大勢を支配するものは、依然京戲であるが、名優譚鑫培の死後年々に衰へ、漸く梅蘭芳等の新排戲に依て晩照を支持してゐるに過ぎない。併し之れとても格別新生面を開いたわけではなく、只從來の京戲に前時代の崑曲味を多く加へ、彼が旦角出身である所から、京戲の中で餘り發達しなかつた女役を極度に活かし、一時おろそかであつた舞踊の點に力を入れたのである。

右様なわけで、支那劇の主流は何といつても京戲である。故に先づ京戲を說けば支那劇全體の概念を得らるゝわけである。題して支那劇云々といふも、實は京戲を說くに外ならない。

一般に芝居の事を戲といふ。聽戲、看戲などゝいふのは、芝居見物の意味である。之れに就て、先づ文戲と武戲の差別を見ると、文戲は歌が多く聽覺の方面に勝つ。武戲は立廻物で視覺の方面に勝つ。併し立廻物も鳴物に合せて動作を起すのであるから、此點からいへば結局凡てが聽戲であらう。故に京戲を說くには音樂を本としなければならないが、之を文章に現はして、讀者に興味を感ぜしむのは、甚だ困難である。

此種の劇は本來が野外劇で、空地に小屋組みをしたのであらふが、舞臺の形も廟の神樂堂などが原型であらふ。即ち凸字形に突出し其突出した部分が舞臺である。舞臺の正面に囃方の席を置く、彼等の背後は幕である。其幕の兩端に登場口と下場口がある。看客席から向て左が登場口で右が下場口である。樂屋は舞臺よりも數倍の濶さを要する。亂戰の際などには、多くの端役が登場口から出で、舞臺の眞中にゐる主役の活擊を受け、下場口へと遁竄するがすぐに又登場口から現はれる。之は同じ顏が出るのであるが別人を意味し、其同數の度に從て、數十倍の人數を意味するのである。又大勢の官監、侍從を從へた王様や、多數の部下を引連れた將軍などは、みな一緒に舞臺に現はれるが、之等の端役は一時舞臺に整列した後で、一廻りすると、大將と二三の副官を殘して引込んで仕舞ふ。斯の如く役者は舞臺を半圓にしてぐるぐる廻ることが非常に多い。即ち舞臺は廣大な場面の或一部分であつて、必要の最小限度を用ゐ、主要の人物だけ殘して其他は一切省略する。若し其處が宮殿ならば、奥には未だ必要な部屋が幾間も幾間も接續し、前には庭があり、出入の門のあることさへも假定する。若し又陣營ならば後ろに數萬の味方があり、前に數萬の敵があり、山もあり、川もあり、荒野もあることを假定する。

脚本も同様の意味で、長篇物の或一部を無造作に切放して使つてゐる。之が日本の淨瑠璃劇、太閤記十段目尼崎の場面のやうに、一夜の中に、あれほど多くの變化があつて、複雜な事件が盛り込んであるならいゝが、そんなことは如何なる脚本を見ても、先づ無いと斷言して好い。だから全篇の知識がないと甚だ興味が薄い。此平板を救ふ爲には、文戲は歌に依て面白味を添え、武戲は型に依て面白

味を添えてゐる。併し其歌其型も、音樂的舞踊的方面から見て、藝術的價値の甚だ低いものである。只彼等は超人的英雄や神の威靈を固く信じてゐるので、立廻の役者に藝術以外の神祕を感ずるのであらふ。さうして歌曲は調句から受ける感覺と理解を擴大するもので、或は情景の幻影を感じ、知らず知らず悲歌激越の情に釣込まれるのであらふ。團匪事件の排外興國運動は、彼等が劇に依て養はれた英雄崇拜である。從て科學文化の侵入した今日に於ては、其魔力の殆ど全部を失ひ、京劇の衰落を來したのである。

それは偖て措き、支那劇でいつも問題になるのは、あの騷々しい鑼鼓である。幕の無い支那劇は能樂のやうに先づ囃方が出場する。囃方の方で銅鑼と太鼓方が先づ着席し、琴師（胡弓彈）と其他の樂手が續いて着席する。

京劇は音樂上からいふと、二黄西皮戯（アルホワンシーピーシー）で、略して皮黄戯（ピーホワンシー）といふ。樂器は大鑼、小鑼、小鐺鑼、太鼓、班鼓、大鈸、小鈸、檀板、胡琴、三絃、月琴、笛子、大鎖吶（スナ）、小鎖吶の十四種で、劇に依て此内數種を減ずることもある。胡琴はいかなる場合にも必要で、尤も多く能力を發揮するが、鑼鼓、檀板の拍子に指導される形式であるから、鼓師には一目置く。

偖て囃方が出揃ふと、先づ鑼を打て鼓に合せ、之を開場鑼といふ。開場鑼以前には一切の鳴物に觸れることを許さない。開場鑼に對して閉場鑼がある。概して文戯は小鑼を用ゐる武戯は大鑼を用ゆる。

銅鑼には數十種の曲目があつて、支那の舞臺構成には無くてはならぬものである。あゝいふ幕の無い背景のない劇に、若しこれが無かつたら、前場と後場の見分けが出來ない。例へば後ちに掲ける「空城計」に於ても、城内の場面と野外の場面をのべたらに演じるので、慣れない看客の眼には甚だ混亂し易い。況して一劇が終つて一劇が初まる時にも、のべつ幕無しに演じるので、それには特別の注意を與へる必要がある。

今、文戯の「打棍出箱」が終つて、武劇の「桃華車」が初まるとする。此時換場鑼鼓に依て「打棍出箱」の市街邸宅の光景を聯想せしめる小鑼及胡琴の聲は一變して、荒野の陣營を聯想せしむる陣鑼の聲になる。續いて岳飛其他の勇將の姿が現はれ、看客をして甚だ自然に次の劇を味はゝしめる。「桃華車」が終ると忽ち小鑼の上場鑼鼓が聞え「汾河灣」の清婉柔和の旦角（タン）が現はれる。さういふわけで新式舞臺の開幕や閉幕や背景の組立や取壊はしの手數を一切省く。布陣の形容には銅鑼尤も適當であるが、決してそればかりではない。自然物の形容には他の樂器と併はせ用ゐ、尤も美的な感覺を喚び起す。例へば「安天會」や「金鎖陣」の場合には殺氣滿々、陰慘黑暗の感を强うするが「刀會」の關羽が上船、江を渡る時には波濤滾々、水聲汩汩の響をなし、舞臺は頓みに汪洋たる大江の壯觀を彷彿せしむ。併し又「水鬪」の唱ふて水釉子に至らば、鐃鈸の響は星々灑々、大水徐ろに來るの感あらしむ。

藏藏、扎扎扎、扎扎扎、藏藏、扎扎一扎扎。扎扎一扎扎。藏藏。扎扎一扎一扎一扎扎。藏藏、折折。爭藏一爭而浪藏。爭藏一爭而浪藏。折折。藏爭一藏藏。藏爭一藏藏。折折。藏一藏、藏一藏。折折、藏藏。折折、藏折、藏折而龍藏。

かういふ風に銅鑼には嚴格な譜があつて、多年の練磨を經たもので、決して無茶に叩きのめしてゐるわけではない。大體野外で演ずる時には、カチ〳〵といふ固い太鼓の音と共に、相互の交響をなし、一種いはれぬ爽快の感を喚び起すのであるが、之を末梢神經の尖つた看客を迎へるために作つた現代劇の劇場の中に入れたのは無謀も甚しい。

先年バーナード・ショウが上海に立寄つた時、彼は歡迎會の席上で梅蘭芳に此事を訊ねた。「英國の劇には鑼鼓のやうな音聲はない。蓋し、演劇の時にはたつた一つの雜音さへ、看客の注意力を損ふものとして固く禁ぜられるのであるが、支那の演劇は頗る騷々しい。若し英國の兒童が之を聽いたなら、驚扶の蟲を惹き起して直に引きつけるだらふ」

と皮肉つたが、之は日本人にも御同樣に感ぜられる所である。ところが此鑼鼓なるものは、遠く漢代に溯り、當時帝室の朝宴、御駕の鹵簿、軍中の行進、陣上の勢威を示すもので、後には道教の魔除けの式に利用され、遂に一般民家に傳はり、年末年頭には長時間に渡つて必ず之を打つ習慣になつた。去年の鬼を逐拂つて、今年の福を迎へる芽出度い響に感ずるのであらふ。だから京戲の開場に之を用ゆることは、穢ひ淸めの意味にもなり、看客を歡迎する意味にもなる。大體皮黃戲は北方人の豪邁の資性から、靡々の音を嫌らひ、腔調を更めて亂彈をなし、何百年といふ歷史ある崑曲に取つて代つた。だから京戲の出發點から云つても、此騷擾は誠に已むを得ないことである。

尙ほ開場には緣喜を取るため、「跳加官」といふ一劇を加へる。之は日本の「式三番」に當り、普段は省略するが、元旦戲には必ず演ぜられる。加官は畸形の假面をかぶり、加官蟒といふ特別の織物で作つた衣裳を着用し、身體の運動に從て色が變る。役者は運動の痕跡を見せずに色を變へるのを妙技とする。此日は加官の出る前に四靈官が出場し、舞臺の下で爆竹を放ち、滿場は紅紙の燃ゑ殼で埋まるのを、四童子に依て內に掃き寄せられ、加官の跳舞が始まる、跳り畢ると、正面の卓上に二つ置かれた盤中の銀盔頭のうち、左の方の物を取つて盤ぐるみ捧げ、看客に示したあとで、盔頭に結びつけてある黃色の絹紐を引くと「開市大吉」といふ紅紙が現はれる。そこで盔頭を元の位置におさめて退場。

次に起財神鑼鼓の演奏の下に、毘沙門天のやうな武財神が大元寶を持て現はれ、種々勇壯なる武劇の型を見せ、跳り畢ると、今度は右の方の盔頭を持出し、加官同樣に絹紐を引くと「萬事亨通」といふ紅紙が現はれ、之も亦元の位置に納めて退場。

此時止め場の元締が二人、左右から臺下に進んで立つてゐると、臺上の道具方と見張役は盔頭（カブト）の盤を一つづゝ持出し、舞臺の口許に來て、盤を差し伸べ、中に置いてある紅紙を交附する。そこで元締等は各自正面樓敵の左右の柱に之を貼つて「魏加官」の祝儀が終る。さうして愈々本舞臺に入るのである。此日は儀式のために開場を一時間繰上げ、午前十時から開演する。之を「天官賜福」といふ。

此劇は明代中葉から起つた吉祥劇で、既に三百年經過し、崑曲を經て傳つたもので、皮黄戯でも秦腔でも江西戯でも徽州戯でも之ればかりは變りはない。唱は「雨順風調、萬民好、慶豐年、人々歡樂……」等々で、先づ年候の順調を祈り、人力の盡すべきを勸め、節儉、積善等を奬勵してゐる。士農工商を代表するため、武財神の外に、牛郎織女、文曲星を加へるのが最も正しい。

偖て本舞臺に入り、役者は登場するや否や先づ徐ろに登場白を陳べる。之は歌ではないが字句が整正し、一種規まつた聲柄に當て嵌める。之を皮黄戯では「引子」といふ。引子終つて初めて說白（ナリフ）を述べるのが、順序であるがその間に詩を加へることもある。之も唱ふのではない。只平仄に從て念誦するのである。

舞臺の方位は看客から向て左を青龍とし、右を白虎とする。役者は彼等の遠信上、白虎を踏むことを忌む。故に左方の登場口から出ると、眞直ぐに歩み左の見附柱まで來て「引子」を終り、三角線を描いて中央に來る。此動作も白虎を避げる意味で、決して右の見附柱には來ない。さうして獨白で過去の經過を概說する。或は又すぐあとから出て來る配役と問答して事件のあらましを看衆に知らせる。例へば「空城計」の出し物だと、先づ孔明が二童子を引具して現はれ「兵は祁山に差し向けてある。司馬懿を擒にしたいものぢや」といふのが引子である。次に注進が登場し、地圖を捧呈する。孔明戰線を見て喫驚して「お前は之れからすぐに列柳城へ行つて、趙雲將軍を呼んで來い」と命ずる。孔明使者の退出を見送り「どうも馬謖の無茶には困つたものぢや。出發の際、山を小盾にして水邊に近く陣取れ、とあれほど固く吩咐けたのにわしの言葉を用ゐず山上に陣取るのは何事ぞや。街亭は恐らく守を失ふだらふ」と嘆息する。再び注進が飛んで來て、街亭の敗戰を告ぐ。孔明、馬謖を用ゐた責任感に打たれながら、モウ一度調べて來いと命じる。すぐに又、司馬懿が當城に向つて出發した報らせが來る。

孔明は再び探査を命じながら、先帝の遺言に鑑み、自分の失策を感じ、悔ゐても及ばぬことを知り、對策を案ずる折、又々急報が來る。「司馬懿の大兵は既に四百里の距離に迫りました」

此報告には孔明も聊か色を變へたが、更に再探査を命じ「おゝ司馬懿の大兵は素晴らしい速度で進んで來たものぢや。司馬懿用兵神の如し。今日果して彼の手並みを見て感心した。今度は殆ど兵を用ゐる盡して當城には老兵弱卒ばかり殘つてゐる。此分でゆくと、わしはモウ手を束ねて、彼の捕虜にならなければならぬことになつたわえ」と一思案して空城の計を思付き、留守の老兵を呼び寄せ、彼等が慄ぢ慄れてゐる樣子を眺眼に掛け「四門を大開して各門に二十名を配し、街道を掃除せよ。司馬懿

の兵を見ても、決して驚怖の狀を示してはならぬ。命に違ふものは斬る」と嚴命する。

老兵答へて「はい承知致しました。假令ひ丞相から死罪を免ぜられても、此分では決して活きてられる見込は御座いません」といつて退く。孔明、彼等を見送り

「天吓天哪（テンシヤーテンナア）、漢室の興亡は、今や此空城の一計にあり」と嘆息する。

此處までが說白で、之から先きが歌になり鳴物に合せる。前記の「天吓天哪（テンシヤーテンナア）」は嘆息の說白である

と同時に囃方への合圖である。

囃方は是に至て奏樂に取掛る。

拍塔（パタ）、鎗鎗（チヤン〳〵）、鏡鏡鏡（チヤン〳〵〳〵）、鎗鎗（チヤン〳〵）、一令鎗（イリンチヤン）

と鑼鼓が鳴る。胡弓は流水の如く、勢よく迂迂曲折して進行する。孔明は此鏡鏡鏡（チヤン〳〵〳〵）の處から聲を乘せて唱ひ出す。

〔唱、西皮搖板〕我用……兵數十年……從來謹愼……錯用了小馬謖……無用之人……設下了空城計、我的心神不定……望空中……求先……帝……大顯……威……

（わしは數十年間、兵を用ゐて、用心堅固に少しの錯誤がなかつたが、今、役にも立たぬ馬謖を誤用し、空城の計をなすに至つた。だが心がどうも落着かぬ。空中に向つて、先帝に求む。威靈を大に顯はし給へ。）

と唱ひ畢つて、童子を引連れて登場口から退場する。

此處で大銅鑼を急速に鳴らし、しばしの間「急急風」といふ曲目が奏せられる。

城內孔明陣營の場面が消えて、四十里離れた荒野の場面に變る意味である。

入りちがひに司馬懿登場、顏を墨と白粉で隈取り赤い支那鎧を來て、兜をかぶり、背に三角旗を四本挿し青龍刀を持つてゐる。例の通り左の見附柱まで來て中央に出て、看客席に向つて一寸見威を切つて右の下場口に入る。

再び銅鑼大に鳴る。之も「急々風」といふ曲目である。舞臺には何の變化もないが、今司馬懿の出て來た反對の方角で、城を挿挾んで恐らく百何十里も相隔つてゐるのだらふ。

入り交がひに趙雲現はる。孔明の急使を受けて急いで馳け付ける途中である。彼は素顏のまゝ綠色の鎧を着て槍を持つて登場、之も舞臺の眞中で大見威を切つてすぐ下場す。

入り交がひに二老兵現はれ、箒を持つて舞臺を掃く。

小鑼鼓、胡琴の吹奏なごやかである。城門前の光景を示す。

引續いて孔明、二童子を具して登場、出城巡視の意である。

一寸申遲れたが、孔明は白い顏で黑い髯をふつさりと垂らしてゐる。着附は白緞子に八卦模樣を黑繡せる廣袖の大袍で、頭には八卦太極の圖を繡せる道巾をかぶつてゐる。

彼は老兵を慰撫して城樓に登る。

二卓子を連接して前面三方に、白拔き煉瓦模樣のある藍布を以て圍ふ。藍布は高さ六尺幅十尺ほど

で四本の竹桿で支えてある。

孔明は卓子の上に立つと、上半身が現はれる。二童子左右に侍して琴を支持してゐる。之が即ち城樓である。

そこで孔明は城外を展望し大軍の襲來を認め、曾て己れは臥龍岡を出でゝより毒心慘澹して漢室の爲に天下の三分の一を得、武鄉侯に封ぜられ、其後各地に轉戰した事を回想し之を古人に比して自己の襟懷を抒べた上、現在退屈して城樓に登づて琴を彈いてゐるが、此琴の妙味を知る者はあるまいと笑ふ。

此處は說白を用ゐず、凡てが二黃慢板の歌唱で、美聲を發揮し大に聽衆を呻らせるのである。

此時既に司馬懿、前面に現はれ、城門の大開せるを訝り逡巡して入らず。

孔明彈琴して遙に見下ろし「此處は老兵弱卒ばかりで伏兵は無い。羊羔美酒の用意がしてあるから遠慮なく這入れ」といふが、司馬懿は奇計を恐れて遂に入らず、俄に諸將に命じて四十里外に引上げる。其時早くも趙雲が馳せ付け孔明の命に依て司馬懿の陣營に向ふ。司馬は趙雲の逆襲を見て、己れの推測の違はぬことを悔るが、まもなく偵察の報告に由り事實、空城であつたことが解る。さらばモウ一度前進せよと命じたが、もはや孔明は關中に去つたあとである。

司馬懿は嘆息して「諸葛！　諸葛！　お前は眞に大膽だ。司馬！　司馬！　お前は眞に小膽だ。司馬は眞に亮に如かず、全軍退却！　退却！」と捨て說白で下場。

右樣の概念を得て支那劇を見ると、支那語が一語も解らなくとも面白味が出る。況して歌の節が簡單であるから、或る一つの劇を續げざまに二三度ときくと、すぐ馴染になる。又各劇とも共通の節が多いからあちらこちら聽きかぢる中には、どれも之れも聽き易くなつて來る。皮黃戲ほど旦那藝をなす者が多く、又兒童走卒も唱はぬ者はないのは、原因は之に基くのである。

皮黃戲は初め整本（トホシモノ）を多く用ゐてゐた。道光以前、張德大の「昭代蕭韻」即ち「楊家將」は元よりいふまでもなく、道光咸豐時代でも三慶班は「三國演義」「列國」「乾坤」等を仕組んで上演し、四喜班は「五彩輿」「梅玉配」「雁門關」「德政坊」等を作り、春臺班は「混元盒」「綠牡丹」等を作り、福壽班は「龍馬姻緣」「兒女英雄傳」「十五貫」等を作り、いづれも通し物として之を上演した。ところが其後一般に役者を偏重し、脚本の筋などはどうでもいゝことになつたので、役者は隨意に之を切取つて演じ、遂に今日の斷頭斷尾劇をなしたが、之は歌調と聯想に重きを置く當然の歸趨であつた。然るに清末には留學生に依てドラマが輸入され、背景を作り、鳴物も下座に依つて行はれた。又上海の俳優夏月潤は日本に渡つて市川左團次の指敎を受け、舊式舞臺の不合理を認め、上海九畝地に新舞臺を新築し、廻舞臺など作つた。續いて天蟾舞臺、大舞臺、第一舞臺等いづれも此方式に倣ふて造營したが、本來舞臺裝置の必要のない皮黃戲に取つては、却て之が厄介物となつた。そこで舞臺のために脚本を作るといふ珍現象を生じ「洛陽橋」「斗牛宮」のやうな只他愛のないお祭のやうな芝居が出來た。

之を彩燈劇と稱し、彩燈結綵を以て舞臺を滿飾する一種の支那式レビウであつたが、そこに何等活動的のものがなかつたので、永く看衆を引付けることが出來なかつた。そこで一座の潘月攜は長髪賊を材料にした「鐵公鷄」を仕組み、立廻りに重きを置いた。今まで、明の服裝による「皮黄戯」を見飽きた上海人は、此清代服裝劇を頗る目新しく思ひ、大歡迎をなし、他の劇場も之に模倣し「左公平西」「湘軍平逆」「永慶昇平」など、競うて長髪賊劇を作つた。

同時に稗譯劇に依て、「黑奴籲天錄」や「茶花女」（椿姫）や「不如歸」のやうなドラマも行はれた。（日本留學生陸鏡若等の新柳劇社で創始されたドラマは新味があり、活氣があつて大に未來を嘱望されたが、後ち夏月潤等の上演に依て凡化し、凡化したことに依て一般に擴つた。）

上海初期の映畫は武俠的探偵物「黑衣盜」「鐵手」「奇怪船」「隊戯奇緣」等で、此刺戟や影響を受けたのが、「宏碧緣」即ち俠盜劇の通し物であつた。續いて「濟公活佛」や「狸猫換太子」「飛龍傳」等の傳奇劇が流行し、いづれも馬鹿長い整本物で、續篇が續々現はれ、無限大のものであつた。其後「封神榜演義」や「開天闢地」のやうな神魔物が現はれ、背景の技術的變化と扮裝の奇拔に重きを置き、且つ魔術を多く利用したが、現在でも尙ほかういふレビウ式のものが上海では多く歡迎される。

京劇は本來整本物から出發したのであるが、俳優の喉本位の爲に脚本が一時支離滅裂し、偶ま譚鑫培を失ひ、耳に失望を感じた聽衆は、上海俳優の北上に由り、此杜撰の整本物を無條件で歡迎した。即ち周信芳の「狸猫換太子」蓋叫天の「楊家將」「雷峯塔」など、一時北京の劇界を風靡したものである。

同時に又聽覺を主とする艷生を失つた看衆は、視覺を喜ばせる旦角劇を歡迎した。

旦角はいづれも美人を題材にしなければならぬ。美人は宮中の貴人と小家の碧玉（町娘の類）青樓の娼妓にまさるものはない。即ち梅蘭芳の「西施」「洛神」「太眞外傳」程硯秋の「文姬歸漢」「梅妃」「除碧雲の「褒姒」朱琴心の「陳圓圓」等は第一類に屬し、程艷秋の「花舫緣簪」「斟情記」「碧玉簪」徐碧雲の「綠珠」等は第二類に屬し、程硯秋の「賺文娟」徐碧雲の「李香君」は第三類に屬するものである。だが其中で獨り梅蘭芳が頭角を露はし、日本に來り、米國に渡り、現在又ソビエト露西亞に入込み、世界的名優の名を縱まにしてゐる。それゆゑに現在の支那劇は、皮黄戯に崑曲を加味した歌舞劇で、且つ旦角全盛時期といつて差支えない。

寄席概觀

江南に書場といふものがある。書場は日本の寄席に當る。設備は茶館の內部に講壇を設け廣間に多數の方桌を並べ、客は方桌の前に坐して茶を飲みながら聽く。

書場で行はるゝ藝事は讀みもの語りものに限られ、日本のやうな色物席はない。近頃上海では娯樂場が發達し、大世界、新世界のやうな大建築物の中に凡ての興行物を寄せ集めてある。そこには芝居

もある。書場もある。活動寫眞、手品、物眞似、手踊、輕業、漫才のやうなものまでもある。

支那の讀みもの語りものは地方に依て名目を異にし、讀みかたも語り口も言葉も發音も皆變つてゐる。例令ば北京の樂子（ローツ）、天津の太鼓（タイク）、揚州鎭江の六書（リウシュウ）、紹興の平調（ピンテヨウ）、蘇州の說書（セーシュウ）、上海の灘黃（タンワン）などである。その中で一番かたちの整つてゐるのは蘇州の說書である。

一體蘇州語は支那ぢうで一番癖のないたいらな言葉である。此言葉を用ゐて、長い人情話をするのは非常に都合のいいことだらうと思はれる。それは感情を現はすときに上下に延びが利いて變化が多い。北京語も、廣東語も、その他の地方語も或は澄み、或は濁り、或は角張り、或は粘ばり、歌としてみれば、それ〳〵特徵があつて面白いが、讀みもの語りものを續けるには蘇州語が一番具合がいいやうである。支那講談が蘇州で大成されたのも偶然でない。

說書の名の起りは宋史に「仁宗は太后の年老ゐたるにより、特に崇眞殿に說書官なるものを設け、古今の軼事を講演して太后を娛ましむ。後ち遂に例となり南宋に傳る」とあるが、これは今行はるゝ說書ではない。一種の宮中侍講である。だが此種の藝事は矢張り宋代から始まり、鼓子詞と搊彈詞から出たやうに思はれる。璽谷溫氏が南曲發達の經路を說かれた中に、唐の元微之の會眞記を題材にして、宋の趙德麟が商調「蝶戀花詞」を編み鼓に合せて唱つたのが鼓子詞である。又金の董解元が同じく會眞記をタネにして「絃索西廂」を編み、琵琶に合せて唱つたものが搊彈詞で、北曲西廂記の基ゐをなし、明代に至つて更に南曲西廂記が大成された云々と、

これは西廂記に就いて支那劇の發達振りを示されたものであるが、寄席の方も實に此會眞記のお藏を蒙つてゐるのである。會眞記は格別面白いものでもないが、只崔鶯鶯の

待月西廂下、迎風戸半開、隔牆花影動、疑是玉人來、

の詩がいかにも美しい處女の優情を示してゐるので、後世の文人を刺戟し、幾度も同じ題材を以て面白い歌狂言が仕組まれたのである。說書の中にも西廂記はある。又說書の珍珠塔の中の翠娥と采蘋の主從關係は、西廂の鶯鶯と紅娘の關係によく似てゐる。これは燒きなほしではないが西廂の感化を受けることが多く、又支那の家庭の狀態が唐代も淸代も格別變りがなく、あまりに貴族的な彼等の生活は、召使の意志に左右され易く、遂に主人は人形のやうになつて仕舞つたのである。

鼓子詞は…一名盲詞と言つて、盲人が人中へ出て鼓を叩いて唱つた大道藝である。これはいつ頃からさうなつたか知らないが、陸放翁の詩

斜陽古柳趙家莊、負鼓盲翁正作場、死後是非誰管得、滿村聽說蔡中郎、

がよく引合ひに出るところを見ると、宋時代には盛んに行はれてゐたのである。わたしは此詩を見ると今の算命先生（サンミンシイサン）を想ひ出す。算命先生は瞽の占內者で、子供に手を曳かれながら蛇味線を脊負ひ、磬と撞木を片手に提げて、チーンチーンと搖り乍ら歩く。若し占內を求める者があると、彼は先づ年齡をきいて干支を繰り、蛇味線に合せて身の上の判斷を唱ふ。その歌が今の天津太鼓などに似てゐる

昔の盲詞は今の算命先生の歌に類似してゐるのではなからうか。

商調蝶戀花詞十二闋が語りもの〻前驅をなしてゐるのは、恰度小町お通の浮瑠璃姫十二段が、日本浮瑠璃の草分けをしてゐるのと一致してゐるやうに思はれて面白い。

今の皷書は八旗の子弟が創作したもので一名子弟書といふ。文句は上品で聲は穩かである。東城調西城調の二派に分れてゐる。西城調は尤もゆるく低く節廻しが長い。北京城內、旗人の得意とする者暫藝人の皷書は聊か落ちる。北方の皷書は南方の說書に當るものである。

といふ靈南氏の說は、我が德川時代に御家人が歌澤を案出したやうなもので、まことにさうありさうなことである。

皷書の中で、天津太鼓（テンシンタイク）と梨花太鼓（リーホウタイク）は山東から出たものである。天津太鼓は平話が少し這入るが、それは歌を引出すための言葉でせりふではない。昔の鼓子詞の散序と同じものである。

天津太鼓…の長い節は算命先生の歌によく似てゐるが、その短い節、殊に疊込んでゆくときには非常な早言である。それは單音語を一瀉千里で讀み飛ばし一分間何百語を唱ひつゞけるのだから、これほど意味の多い言葉を、これほど短時間に述べ立てることは世界中類例のないことである。太鼓は直徑一尺二寸位のもので細いバチで叩く。同時に調板といふものを左手にかかげ、搖り當てて拍子を取る。調板は乾燥した二枚の木片である。

梨花太鼓…は劉鶚の老殘遊記にある通り、淸末山東地方で白妞といふ少女が工夫したもので、京劇の名家程長庚、張二奎、余三勝などの節を取入れ、それに南方の歌を加へて一種の新調を發明したのである。近頃上海でも非常にはやつてゐる。その唱ひ振りは京劇を逆にしたやうなかたちで上から下へ抑へつける。なるほど天津太鼓よりも餘程艶ッぽくなつてゐる。梨花太鼓は調板の代りに梨花簡（リーホウカン）を用ゐ、太鼓と太掉の蛇味線で合せる。梨花簡は月形の鐵片一枚である。この鐵片は太鼓と調子を合せることは勿論であるが、アイアイ、アイアイ、アイアイ、アイアイ、ア——イと節を聽かせる時には單獨で振る。歌詞の內容は宣卷と同じやうに、或る故事の輪廓を述べたもので、文學的價値は甚だ低いやうに思はれる。以上は北方の語りものである。

鼓書も灘黃も聲を聽かせるのが重なる目的であるから、文句は寧ろ二の次ぎで規模が小さく、時に依ると隨分筋の通らない杜撰極まるものでも大に歡迎せられ、一篇一時間乃至數時間で畢る。ところが說書はこれと反對に話を聽かせるのが主意であるから、その讀みものは半月乃至一箇月に渡り、內容の撰擇に就ても充分注意し、言葉がハツキリして聲や節廻しが好く、そのうへ平仄までも正さなければならない。說書藝人が台本を寶物のやうに扱ふのは當然のことである。

說書

説書は評話と彈詞の二種類に分かたれてゐる。一般には評話を説書といひ、彈詞を唱書といふ。

評話…は日本の講談と同じで張り扇と木を用ゐ、軍記物、武勇傳、俠盗傳、神怪傳などを説く。

彈詞…は浪花節に相當するもので、歌が短く話は長い。恐らく攤彈詞から變化したものであらう。これには單檔（タンタン）と雙檔（サンタン）とある。單檔は彈き語りで琵琶のみを用ゐ、雙檔は掛合ひで、一人琵琶を持ち一人蛇味線を持つ。琵琶も蛇味線も極めて音が小さく閨女の呟きのやうな可愛らしい聲を出す。聲柄は哀れになつかしく江南水郷の軟かい趣きがある。琵琶は崩れのやうな場合には五指を悉く用ゐ旋轉して彈く。一方これに合せる蛇味線は段楷子を昇り降りしてゐるやうな調子である。

現在のやうな話がいつ頃から行はれたかといふに、郷下人氏の説に據ると、明末柳敬亭が水滸傳の武松打店酒甕を説き四公子に依て稱導されたのが始まりで、清朝に入り乾隆年間高宗南巡の時、吳人黄周士が白蛇傳の御前彈唱をしてから、説書は蘇州人獨特の藝となつた。だが當時は流行の範圍も狹く、僅に嘉興、湖州、蘇州、松江、常熟、太倉の六七府に過ぎなかつた云々と。

此柳敬亭説は我が曲亭馬琴翁が愚民を敎化するため講談席に現はれたのと甚だ類似してゐる。曲亭翁は何から何まで支那流儀にやつてのけた人であるから、恐らく柳敬亭の眞似をしたのかもしれないそれかあらぬか、日本の講談の口演振りは頗る支那臭いものである。わたしは嘗て金瓶梅と今古奇觀を譯してみたが、これを忠實に飜譯すると、日本の講談ソツクリの文體になつて仕舞ふ。例令ば「三姑六婆は姦盗の媒と申しまして第一はこれ〳〵、第二はこれ〳〵」と一々婆の色分けをして、餘談は

偖て措きと本文に入るところや「聞かずにゐればそれまでだが、一旦聞いたからにはそのままにしては置かれない」といふ風な頓挫抑揚がくどくど繰返へされる。又或る事件があると町内の人が途轍もない噂をする。又或る偉い人が貧しい身裝りをして門前に來ると、門番などが頗る横柄に出る。ところが間もなくそれが解つて、急に手の裏を返へす。いはゆる端敵の小人氣質を見せて笑はせる。此等の骨法が呆れ返るほど、支那と日本とよく似てゐる。以上の通り評話すなはち講談の方は日本と格別相違がないから、わたしは彈詞に就て重に述べようと思ふ。

彈詞の體裁は先づ初めに開篇といふものがあつて、琵琶、蛇味線に合せて唱ひ本文に入る。本文に入つても讃十字、開場賦、などといふものがあつて、それから初めて人物が出て來る。主要人物が出る前には必ず、引を以て簡單に現在の境遇を述べ、それから説白になる。説白は先づ姓名、來歴、目的などを自問自答し、やがて相手を喚び出す。喚び出された相手も亦引を以て簡單に形容された後ち、説白に移る。かうして甲乙互に問答し、事件が進行するに從つて感情や形容は凡べて歌を以て現はし、叙事は普通の言葉で説明し、二人が三人になり、三人が四人になり、だん〳〵複雜になる。

説白…は芝居と同じやうに立役、立おやま、實悪、端敵、ふけやく、ぬれごと師、子役などとそれぞれ聲をつかひ分けるが、芝居ほど極端ではない。只いくらか匙加減がしてある位である。物の音はたいてい口眞似である。銅鑼の音など中々旨く眞似る。さうして一回の畢りはたいてい歌で結ぶ。そ

の結び方は「何々の件はどうなりまするか、明日の前講で、詳しく申述べまする」と日本と同じである。

開篇…は本文とは全く關係のない獨立した章句で、王昭君とか西施とかいふやうな古人の小傳を唱ふ。これは長くも三十句以上を越えてはならないのである。一時歌に重きを置いた時には、百句、二百句續けて唱つたことがある。本來開篇は歴史的遺物で、今は全く無用の添えものに過ぎないが、習慣としてこれを唱ひ、聲をならし樂器の小手調べをする。だが歴史上からいふと開篇は甚だ重要なものである。攏彈詞よりもモット前に白居易が聽いた潯陽江の琵琶歌は、恐らくかういふ類のものであつたにちがひない。それが後世發達して攏彈詞といふ段物が出來、續いて平話を入れ、筋道を語り說白を述べ、唱を以て情景を現はすやうになつたのであらう。

讃十字…は結婚などの時に述べる禮讃と同じやうなもので、唱のやうな艶聲はないが、一種の調子はある。これは十字づつに區切り、全篇の要領を述べる。例令ば「春何事ぞ春日遲し鳥啼き花開く」また「彈詞は總べて名教に關する此珍珠塔」また「先づ最初に蓋を開けると孝子慈親あり」また「姑母あり心腸薄し書生怒て走る」などである。

開場賦…は六言、七言、五言といろ〳〵取り交ぜてあるが大抵對句になつてゐる。例令ば「四季晴陰轉瞬、百花開謝隨時、天公位置總無私、何必趨炎附勢、女子千金聲價、書生繡虎文詞」などであるかういふものは凡べて平仄を注意して讀む。

引…は說白を引出す序で文章體ではあるが平話で讀む。例令ば「慈親に奉ず白髮の親、願くば寸草を以て長春に答へん」などである。其他表白、官白、私白などがある。

表白…は地の言葉である。例令ば「偖て方鄕は陳府に參りますと、門前は馬、車で押すな押すなの騷ぎ門番は横柄に」の類である。

官白…は立役、わき役、立女役、二枚目などの主要人物が眞面目になつた場合、暑さ寒さの挨拶、禮儀正しい應待、など皆官白である。これは中國共通の官話である。

私白…は冗談、無駄口、交ぜ返へしの類で、必ず蘇州語を用ゆ。卽ち主要人物が打ち解けた時、或は喧嘩口論した時、又端役の言葉は必ず私白である。例令ば、

王本「おい皆の衆、一寸用事があるから此處へ」

雜役「來哉(レーツエ)、來哉(レーツエ)、阿爹(アテ)、何の御用で」

王本「明後日は殿の御誕生日に當るに依て、おの〳〵受け持ちを守り、廳堂の內外を整理し、なんどきお客樣がお見えになつても、萬一の粗漏のないやうに申付ける」

雜役「委細承知しやした。何から何まで阿爹(アテ)のお指圖通りテキパキやつてのけます。そんならこれから早速取掛らうぢやねえか。おい、兄弟、どうだ」

雜役「ちげねえ、さうだとも」

右の內、王本の言葉は官白で、雜役の言葉は私白である。

次に彈詞の台本「珍珠塔」の內容を略叙しよう。珍珠塔は二十四回に別れ、每回の初めに開篇が添えてあるところを見ると、これは二十四日で讀切の本である。

方鄉は河南祥符縣の名門の生れで、祖父は、宰相、父は吏部尙書の顯官にあつた。彼が十九歲のとき父は惡人の罠に繫つて殺され、財產を官に沒收された後ち火事に遭つて家を失ひ、已むなく先祖の墓場の隅に引移つて來たが、もうあすにも困る身の上となつた。母は其時六十餘りの誥封一品夫人であるが、もうどうにも仕樣がないので、方鄉に對ひ

「本統に困つたね。ほかにしようがないから、襄陽の叔母さんの處へ行つて金を借りておいでなさい。旅費は黃州まではどうやらあるから、あすこへ行つて張通判に話をして、旅費を借りて襄陽へおいでなさい」

襄陽の叔母さんといふのは、方鄉の父の實妹で三十何年前に同地の陳家に片づいた人である。又黃州の張通判は父の門下生である。方鄉は母の仰せを受けて直ぐに黃州に向けて出發した。黃州へ着くと張通判はすでに九江へ轉任したあとで、方鄉はなかば失望しながら許習仙といふ占內者に身の上判斷をして貰ふ。許習仙は財運はないが女運はあるといふ。なんだ馬鹿々々しい。肉身の叔母が我れ

我れおやこを棄てるものか、とムキになつて襄陽に向ふ。

叔母のつれあひは元都察院左都御史を勤めた陳璉といふ人で、今役目を引いて襄陽に閑居してゐる。かつて方鄉の父から敎を受けたこともあり、又姻戚の關係上方家の沒落を心配し、人を出して彼等母子を引取らふと思ふ。ところが戰亂が始まつて便りをする機會がない。彼と夫人の間には翠娥といふ一人娘がある。それがもう妙齡になつてゐたので、陳璉は方家の恩義に酬ゆるために方鄉を迎へて婿にしようと思つてゐた。折ふし陳璉の五十の誕生日に當り、大勢の客を招いて酒宴を開き芝居を催したが、その中に若い男も隨分來てゐる。陳夫人は夫と丸切り反對の考を持つてゐた。自分の身內でありながら沒落した方家にはもう用がない。以前は里方の榮耀を鼻に掛け、ずゐぶんヒケらかしたものであるが、今はそんなことをオクビにも出さない。さうして金持の若い好い婿を撰み出さうとしてゐる。

方鄉は何百里といふみちのりを夜晝歩いてやうやく襄陽に着いた。見ると陳家の門前はうま車でゴタ〳〵してゐる。方鄉は構はず名刺を差出すと門番は彼の汚い姿を見て、てんで相手にしない。

陳家の執事王本はもと方家の家來で、陳夫人が此處に片附いて來たとき、供をして來た者であるがそれからずつとゐすわりになつてゐた。彼は方鄉の幼な顏を覺えてゐたので門番をたしなめ、方鄉の來訪を陳公に取次ぐ。陳公は喜んで會見し、目下の窮狀を聽取つた上、陳夫人に逢はせる。陳夫人は肉身の甥が來たので喜ぶと思ひきや、意外にも小六ツかしい理窟を並べ立てその姿は方家の恥辱と、

一も二もなく追ひ返へさうとする。方郷烈火の如く憤り、叔母とろんぱんして、結局陳家の厄介にならぬと言つて退く。夫人附添ひの腰元紅雲は、乞食のやうな方郷の姿と主人の口振りを見て、方郷を頭から馬鹿にしてかかり、運んで來た方郷の行李を花園の中途でおッぽり出す。

一方翠娥附添ひの腰元采蘋は、方家の若様が來たときいて覗いて見ると、いかにも汚ない風體ではあるが、男らしい立派な人物と見込む、さうして陳夫人との問答を盗み聽き、慌てゝ此由を翠娥に知らせる。

翠娥は幼な心に方郷の母が優しくして呉れたことを覺えてゐて、日頃戀慕つてゐたが、今自分の母がそれに報ゆることを知らぬ薄情の仕方を見て胸痛く思ひ、花園の中で方郷を引止め、母の無禮を詫び、若干の旅費を贈らうとしたが、方郷は受取らない。ではお饅頭ならいいでせう。みち〳〵おなかのすいたときめしあがつて下さい。と一つのふくさ包を渡す。方郷は翠娥の眞心に感じ、やうやく怒をおさめてそれを受取つて立去る。花園の門を出ようとする時、そこまで送つて來た采蘋は「わたしはお嬢様の腹心の女中です、采蘋といふ名をどうぞ覺えてゐて下さい」といふ。

方郷は城外九松亭まで來たとき空腹を感じふくさ包を解いて見ると、饅頭の下の方から珍珠塔が出る。これは大變と驚いたが返へせば翠娥に迷惑が掛ると察してそのまゝ取り收める。そこへ陳璉は王本と共に馬を飛ばして馳付ける。方郷はテッキリ今のがバレたのだらうと思つて胸をどきつかせるとさうではなかつた。陳璉は夫人の仕方に不滿を抱き、方郷を引留めて立派な人物に仕立てたいと思ひその事を述べたが、方郷は叔母の態度が氣に食はないのでどうしても承知しない。ぜひなく、陳璉は娘を方郷に許す約束して別れる。

翠娥が方郷に贈つた珍珠塔は、彼女の母が陳璉と結婚するとき方郷の母が祝つて寄越した置きもので金銀珠玉を以て組立てた大層な値打ちものである。

方郷は陳公に別れて幾日か旅路を續け、黄州境まで來ると大雪になり、强盗に出遭つて珍珠塔を奪はれ、雪中に倒れて瀕死の狀態に陷る。

提督畢雲顥は母の病氣のため賜暇を乞ひ受け、故郷南昌さして歸る途中、雪崩れのうちに人の呻く聲が聞えたので、船をとどめて救ひ出して見ると、その人は父の恩師の孫で、且つ自分の恩師陳璉の婿であると知れ、手を盡していたわり南昌に連れゆく。

畢雲顥には高齢の老母と一人の若い妹がある。正月元宵の夜、母は方郷をかいまみ、其人物を見拔いて娘繡金の婿にしたいと望む。雲顥は方郷に勸めて名を方正と改めさせ、彼のために江西監生の株を買ふ。又河南には使を出して三百兩の金を方郷の母に贈る。かういふ恩義が重なるので方郷は此緣談を無下にも斷り兼ね、遂に三つの條件を持出す。其條件は、第一母の許しを得ること。第二陳翠娥と先約を濟したあとで畢家の令嬢と結婚すること。第三高等試驗に及第したあとで天子の上意を得る事等で、畢老夫人はそれでもいいと喜んで、處の李太守を媒人に立てる。そこで方郷は急に旅仕度し

て北京に向ふ。

雲顯が河南に出した使は李進といふ者であつたが、途中金を紛失して申譯なく何處へか逐電して仕舞ふ。方鄉はむろんこれを知らなかつた。

一方襄陽の陳家では陳公が翠娥を方鄉に許したときいて夫人は腹を立て女の兒は女親に權利があると主張し、夫婦喧嘩を始め、部屋の道具をぶちこわして尼寺に入る。翠娥は心配して母を迎へにゆくと、別居するなら歸つてもいいといふ。陳公も別居を承知したので夫人は家に歸り西院に住む。陳公はそれから前廳に出たきり奥へはゆかない。だから內の者は外邊老爺（ワイペンラオイエ）と彼を呼ぶ。そのうちお正月になり、夫人五十の誕生日が近づいたので、翠娥は何とかして父母の仲を調停したいと思ひ、新年のお禮にかこつけ、父母を一席に集めて機嫌を取るが、ふと方鄉の話が出て、又も大喧嘩となり、老殺才（たいぜい）老不賢（よてくれ）と互につかみ合ひ、翠娥と王本は双方を引留めて、夫人は持佛堂に入り、陳公は書齋に引込むそのうち春になつた。

陳璉の投資してゐた質屋に或日醉拂が現はれ、身分不相應の品物を持出して質に取つて呉れといふ番頭は出所を疑つて斷る。醉拂は暴れ出す。陳璉はその品物を取寄せてみると我が家の重寶珍珠塔なのに驚き、娘に訊き糺すと方鄉に贈つたことが知れ、同時に彼の身の上が案ぜられ、醉拂を其筋へ突き出す。此奴は邸六番といふ黄州切ての兇盜で、方鄉から品物を奪つたことは自白したが、彼を殺した覺えはないといふ。だが强盜などの言ふことは信ぜられないので、王本を河南に遣はして方鄉の安

否をたづねる。

翠娥は方鄉が死んだものとばかり思ひ込み、それから食事も進まず、うつらうつらする。又父母が始終喧嘩するので心勞のあまりどつと床につく。今にも息を引取りそうになつた時、王本が歸つて來て、河南には若旦那はおろか、老夫人の姿も見えないといふ。そんな事を今娘に聞かせたら大變、と陳璉は心配する。そこで一策を案じ、方鄉の僞書を作つて翠娥の枕邊で讀み上げる。翠娥はこれを聞いてやうやく安心し、病氣もだん〳〵よくなる。

河南に殘つた方鄉の母は水粥に露命をつないで、方鄉の歸りを待ち詫びてゐたが、いつまで經つても便りがないので、遂に意を決して襄陽に向ふ。途中旅費盡き乞食をしながら九松亭に着く。折柄重罪犯人の死刑が行はれ、町ではいろ〳〵の噂がある。よく聽くとそれは方鄉の身の上にかかはることで、賊は彼の財物を奪つた上、彼を殺害したものと認められてゐる。此話を聽いた老夫人は全く手賴りの綱が切れ果てゝ失望のあまり附近の河に投身を圖る。折よく白蓮庵の醉芳尼が通り掛り老夫人を助けて連れ歸る。尼達は概して迷惑がつたが、中には善良な尼もあつて、近々陳家の令孃がお禮參りをするので人手が足りないから此婆さんを使つてやらうといふ。そこで老夫人は白蓮庵の厄介になる。翠娥は觀音菩薩の命日を參詣の日と定め、前から其旨を尼寺に通じて置いたので、尼達は無禮の無きやう懇々老夫人に申含める。偖て當日翠娥は白蓮庵に來てみると、品のいいお婆さんが、ひどい

みなりをしておづ〳〵働いてゐたが、忽ち翠娥の顏を見て涙をこぼす。翠娥は不審に思つて身許を訊き糺すと河南と答へる。そこで人無き處へ連れゆき、祥符縣の方家の模樣をたづねてみると、老婆は悲しさに胸せまり俄に物が言へない。やうやくポツリポツリと語り初め、遠廻しに方鄉の母である事を匂はせ、やがて翠娥の生年月日や翠娥の胸にある赤痣のことまで語り出した時、翠娥は驚いて跪き無禮を詫びた上、すぐに轎を呼んで家に歸り父に知らせる。

靜芳尼は陳令孃が急に寺を去つたので、何か機嫌を損じたものと思ひ込み、慌てゝ陳家に馳付けていひわけすると、令孃は笑つて、お前の處にゐる汚ないお婆さんは、わたしの姑で誥封一品夫人だといふ。さうして救命のお禮として銀十兩を出し、なほ當分尼寺に置いて貰いたいと賴みその禮は別に出すといふ。靜芳尼は腰を拔かさんばかりに驚き、むやみにお辭儀をしてすぐに尼寺に取つてかへし老夫人をいたはり、いい部屋に移す。翠娥は王本に吩咐けて米と着物を老夫人に贈り、又采蘋を毎日通はせて身の廻りの世話をさせ、自分もたびたび顏を出して慰める。

或時白蓮庵に提督衙門の令孃が來たので采蘋は佛壇の裏から覗いてみると、令孃は佛の前に立つて線香を上げ、先づ第一に母張氏の無病息災を祈り、續いてもう一本の線香を立てた時、令孃は「河」と言つて口籠つた。采蘋は「河」といふ字が氣になつてじつと聽いてゐると、令孃はあたりを見廻し「河南開封府祥符縣、方門の婦、楊門の女、誥封一品太夫人の身の上に恙なかれ」と祈つた。それは誰れあらう。此處にゐる方卿の母のことなので、驚いて前に進み出てそのわけを糺すと、令孃は畢提督の妹繡金といふ者で、すでに方鄉と婚約し、今度兄が襄陽詰めとなつたので母と共に此處に來てゐることが知れた。そこで繡金を老夫人に引合はせる。老夫人は方鄉の背約を怒つたが事情をきいてみれば救命の大恩があるので如何ともしやうがない。只翠娥の思惑を氣遣つたが、兎に角方鄉の所在が知れたので大に喜んだ。

方卿は北京に行つて試驗を受け、第一等の成績で狀元に及第した。けれど籍は江西、名は方正となつてゐたので陳家では此事を知らなかつた。當時年貢米の取立に情實が多かつたので新狀元の彼は七省盤查監察御史に任ぜられ、嚴重の取締をなすべく命ぜられた。方卿は陳畢兩家と緣組のことを上奏すると、先づ襄陽に行つて同日兩家と結婚せよと有難き御沙汰があつた。そこで彼は大勢の供人を引連れ官船に乘つて襄陽に向つた。

襄陽に着く一日前に彼は官職の旗や、お上みの威嚴を示す凡べての道具を取りおさめ、民船のやうな體裁を作つた。さうして彼自身も官服を脫ぎ、道士姿に身を變し木魚を手に持つた。これは地方の役人に不意打ちを食はせる積りであるが、一つは又翠娥孃の心を試めす積りであつた。次の日方卿は陳家の裏門から花園に入り、采蘋を呼び出して陳公夫妻に面會を求めた。彼は何處までも道士の風を裝つてゐたので叔母のきげんは益々惡かつた。彼はからかひづらで叔母の前で木魚を叩き、道歌を唱つて蘇秦の嫂とあてつけた。陳公は昔のやうに方卿を憐み、花園の一室に彼を迎へ入れ翠娥を喚び出

した。その時畢提督が來訪したので陳公は席をはづして前廳に行つた。

翠娥は顏をあからめて何事も言はなかつたが、采蘋は方卿の背約を諷したので、彼女がどうしてこんなことを知つてゐるのだらうと內々驚いた。その席には王本も來てゐた。王本は翠娥の病氣で河南に行つてみると、老夫人はそこにゐなかつたことを告げて方卿を驚かしたが、結局襄陽に來てゐることを打ち開けた。そこで方卿も試驗に及第したことを打ちあけ、監察御史の官印などを見せて一家大喜びとなつた。方卿はすぐに王本の案內で尼寺に行き母に逢ふ。陳家の召使と尼寺の尼達は乞食道士が七省盤查監察御史の榮職にあるので喫驚した。畢提督が陳公を訪ねたのは妹の結婚の件であつたが、陳公はそこで初めて方卿の出世を知り、大に驚いた、間もなく老夫人は方卿と一緒に陳家へ來て、翠娥に逢つて方卿の重婚を謝し、陳夫人に逢つて方卿の無禮を詫び入れた上、陳夫妻の和解に盡力し、その晩無理に老夫婦を一つ部屋に押込む。ここで陳夫人が拗ねたり、陳公が年にも似合はず羞しがつたり、滑稽な場面がある。

やがて老夫人は方鄕のために吉日を擇み、陳畢兩家と同時に緣組する。婚禮の裝飾は凡てが二組づつ揃つてゐるので頗る奇觀を呈した。酒宴と芝居は二更頃まで續いて客は散じた。方卿は先づ東院にゆくと、翠娥は繡金に讓り、西院にゆくと繡金は翠娥に讓り、庭內を幾度も行き來して狀元になるよりも婿さんになる方が餘程六つかしいとかこつ。結局其晩は翠娥と同衾し、翌晩は繡金と同衾する。又繡金のはからいで采蘋を妾に入れ、老夫人の世話をさせる。方卿はむかし采蘋の言つた事を覺えてゐる「わたしは孃樣の腹心の女中です。どうぞ采蘋といふ名を覺えてゐて下さい」彼は此言葉をしよつちう忘れなかつた。さうして今も昔も彼女の義俠心に感服する。老夫人は旅行中の辛苦が原因となつて、胃弱に罹つてゐたが、采蘋は身を粉にして介抱する。醫療に手を盡したが更に利き目がないので白蓮庵に七重の塔を建立したい希望を述べる。方卿は見積を立てゝみると、建築材料二萬五千兩。工費一萬兩合計三萬五千兩の金が要る。此內二萬五千兩は內輪の者で集まつたが、あと一萬兩不足し恰度工事費だけ足りない勘定である。醉芳尼は其不足高を公募すると言つてゐたが、急場の間に合ない。そのうち老夫人の病氣はます〳〵重くなつた。そこで珍珠塔を賞に懸け名醫を募る。

或日一人の道士が突然訪ねて來た。見ると黃州の許習仙である。彼は懸賞の珍珠塔を申受け、一粒の金丹を授け、二月十九日觀音菩薩の命日に、白蓮庵內に七重の塔がおのづから建立されると豫言して去つた。

老夫人は一粒の金丹を服むと、身體が輕くなつて病氣は忽ち拭ふがごとくに癒えた。すると二月十八日に大雷雨があつた。翌朝雨晴れて白蓮庵の境內に金碧燦爛たる七重の塔が聳ゑ立つた。醉芳尼は驚いて此事を陳家に知らせる。皆々夢ではないかと呆れたが昔愚公が山を移し女媧が五色の石を煉つた例もあるから不思議なことではないと思ふ。方鄕は母の病氣のため、許可を得て出發を延期してゐたが、是に至つて賜暇の期限も切れたので匆々船を出し任務に就いた。そのとき三人の妻妾は皆孕んでゐた。又五十一歲の陳夫人も陳公の胤を宿してゐた。翌年の正月元宵節に先づ陳夫人が男の子を生

み落し、瑞生となづけた。次いで三月三日翠娥嬢さんが分娩し、四月十五日采蘋姐さんが分娩し、又五月五日金繡嬢さんがお節句の雄黄酒を飲み畢るとすぐ分娩した。端午の子供は好くないといふが、孟嘗君や天竺の阿羅漢のためしもあるから、そんな心配は無用である。以上は皆男の子で長男を茂典次男を茂官、三男を茂藝となづけた。

畢雲顕夫人も同じ年に女を分娩した。方卿はその後工部侍郎に榮進し、畢雲顕は河南巡撫に轉じ、二人は協力して水災を防いだ。兩家は後ちに襄陽に集り、子女を結び合せて、一重にも三重にも縁を繋ぎ、ます〳〵親密の度を増した。方卿は三十になるやならずで、五男二女を得た。老夫人は孫の守やお參りをして日を暮し、藥が利いていつまでも長生きした。王本の倅小榮は繡金の女中玉琴を娶り桐油雜貨店を開いて五六千兩の身代をこさえた。紅雲も亦嫁に行つたが夫がぶをとこで喧嘩ばかりしてゐた。さうして姑と夫をいびり殺し、喜んで再嫁しようとした時、俄に悪性の吹出物を發し全身うみ爛れた。采蘋はこれを哀れに思ひ醇芳尼に頼んで紅雲を白蓮庵に入れ、毎月若干の仕送りをした。境内の珍珠塔はます〳〵光り輝きお賽錢がどつさり上るので尼達は陳家の德を感じた。

灘黄

灘黄（タンワン）は初じめ聲色（こはいろ）やうなものであつたが、今から十二三年前、林步青といふ名人が出てから、海派蘇灘（スータン）といふ一種獨特の唱ひ物となつた。即ち役柄に依て定められた類型的の聲を出して唱ひ且つ語るのである。支那芝居は立役、ふけ役、子供、女形、道化役等にそれ〴〵定められた聲柄があつて、歌も說白も各獨特の調子がある。灘黄はその芝居一齣の口眞似である。これには男形、女形、囃方とわけ、手眞似や身振りを交じえるが、出來る丈け省略して顏も作らず、髪や衣裳も無しに便服のまゝで出る。かういふ芝居の物眞似を初じめは漫然「灘黄」と言つてゐたが、民國六年、新世界といふ遊戯場が上海に出來てから、芝居、寄席其他あらゆる遊藝を網羅したので、灘黄も負けずになつていろいろの流派を起し、蘇灘（蘇州が本元で最初はこれ一つしか無かつた。故に別段蘇の字を冠する必要がなかつた）本灘（上海人は上海を指して本地といふ。故に本灘は上海灘黄である）無錫灘黄、寧波灘黄、武林斑などといふものが現はれ、互に新奇を競ふた。その中で寧波灘黄と武林斑は顏を作り、粗末な髪や衣裳つける。

灘黄の脚本は初じめ崑劇をそのまゝ借用したが、後ちに創作を起し、卑俗ではあるが一種獨特の下世話趣味を示した。此下世話趣味が灘黄の墮落のやうに思つてゐる人もあるが、わたしはさうではないと思ふ。支那の娯樂物は初じめ貴族の手に成り後ちに平民がこれを奪つた。凡ての物は簡單から複雜に進むのが順序であるのに、近世の支那はこれと反對に複雜から簡單に引戻された。京劇は複雜な崑劇を好く消化して自家藥籠中に納めた。灘黄も同じ行き方で、芝居の領分を寄席の畑に奪つた。さうして行儀正しい貴族のお嬢樣を氣轉のよく利く世話女房にした。何はともあれ、現在尤も流行する

灘黄の歌詞を二つほど紹介して、その正體を御覽に入れよう。

〔雙望郎〕ほの〳〵と二階に移る人影や、ポン〳〵と打出すと（灘黄の樂器、皷板の音）そこへ出たのはお孃さん、孃さんは何か想ひ出し、お父さんやお母さんは三人も四人も子供があるわけではないわ。わたしと妹とたつた二人生んだきりだわ、わたしの生れた時には、それはもう大事の大事の寶物のやうで、二年間はお母さんが抱きどほし、三年四年は乳母日傘、五つ六つは學問初め、先生をやとつて九つまで讀み書きを習つたわ。それからずつと部屋の中で針仕事あの海棠の刺繍は日に〳〵あでやかに、今年はもう十八歳、妹は十七歳の花盛り、年頃になると男は女に當り、女は男を撰り分けるといふが、本統にもう日がな一日うつら〳〵して日が暮れて部屋に入るのが情けなく、西も東も男氣は無し、ひとりぽツちで寢るかと思ふと、淋しくて淋しくて、夜ツぴて身悶えせずにはゐられなかつたわ、或日の夕暮、わたしは妹とならんで門口に立つてゐると、向ふから來たのは南村の王德芳想へば隨分大膽者で、なれなれしく二人に話し掛け

「お父さんやお母さんは多分お留守で御座いませう。あなたがさうやつて立つて被在しやると、丸で一對の繍海棠が咲いたやうで」

とぺこ〳〵頭を下げた。見ず知らずの男からこんな事を言はれて腹を立てないと、三分の見込みがあると思はれても仕方がないが、わたしはそつと目遣ひして內に入ると、男は圖々しく跡に跟いて來た。中堂に入つた時、そこはもう暗かつた。男は跪いて苦しい胸の中を語り深い溜息を洩したので、わたしは彼れを引起さずにはゐられなかつた。わたしは遂に彼れを部屋の中に入れ

「おらくになさいませ」

と上着を取つてやつた。彼れは笑つてわたしの髮道具を取卸して呉れた。

妹は何處へ行つたか初じめから姿を見せなかつたが、三更頃いきなりわたしの部屋に這入つて來た。

「不義者見つけた。この扇子が何よりの證據」

と卓子の上に置いてあつた男の扇子を取つてすた〳〵出て行つた。それには持主の名前がハツキリ書いてあるので、若し妹がお母さんにこれを見せたらお母さんは何と言ふだらう。わたしは思ひ切つて男を妹の部屋にやつた。すると妹は十二時頃までろんぱんしてゐたが、やがてひつそりしたので、見ると灯が見えてゐた。さうして帳の釣手がタンタンタンと鳴つた。

「ふん小鼠が糠を食つてやがる」

とわたしは腹が立つて堪らなかつた。

お母さんは夜明けに歸つて來た。わたしはわざと知らせずに置くと、妹の部屋で男の聲がするので

お母さんはびつくりし

「泥棒」

とばかりわめいて刄物を持つて馳付けた。
男は喫驚り仰天して表門はむろん駄目、裏門は何處にあるやら、滅多無生に馳出して、遂に北の窓から命辛々逃げ出した。それからふツつり姿を見せないので、これは愈々思切つたに違ひない、と心配してゐると、きのふあの人のねえさんがわたしの處に訪ねて來て、あれからあの人は重い病氣に罹り水叉坊に引移つて、今にも息を引取りそうな話、知らずにゐれはそれまでだが、一旦かうと聞いたからには其儘にして置かれない。どれ妹を誘つて、一つ病氣見舞に行つてやりませう。
と姉は妹の部屋の前へ來た。
「おやお前は未だ寢てゐるの。こんなにカン〳〵日が照るのに、よくまあ寢られたものだねえ」
とコツ〳〵部屋の戸を叩く。
「ねえさん、何か御用があるの」
と妹は部屋の中で寢ぼけごゑ。
「お前はあの事を忘れやしないだらうね」
「えゝ忘れるもんですか。寢ても醒めても、本統に三度の御飯もおいしくないのよ」
「そんならお前と一緒に一寸お花見に行かうと思ふが、どうだね」
「ねえさん、あのお砂糖が嘗めたくなつたのでせう。今すぐ持つて來ますよ」
「花見と言つても砂糖ぢやないのよ。あのそれ、ダンベロのようなものさ」

「あゝそれなら城隍廟へ行けばあります。あした二つばかり買つて來て上げませう」
「いいえ、さうぢやないのよ。あのそれ、にいさんのことなのよ」
「あんな薄情な野郎はうつちやてお置きなさい」
「でもね、サンビン（生病）なのよ」
妹は尙ほも冷淡に
「ビン（瓶）は小さく壜は大きい、といふぢやありませんか。いつそ死んだ方が增しだ。掛替えを一つ作りませうよ」
「まあそんなことを言はないで、わたしと一緒においで」
「わたしはいやです」
「いやなら、わたし一人で行くよ。さうして若し病氣が好かつたら…それこそわたし獨り占めだわ」
「あらいや、わたしも行くわ」
「どつちが先きへ出ようか」
「きまりきつてまさ、總領が先きへ出るのは」
（唱）ねえさんは先きへ出て、妹はあとに跟いて行く。見舞に行くのはいいけれど、叔母さんが見たらどうしよう。
「お前も拵へるのは上手だが曝すのは下手だね。逢つても知らん振りしてゐるのさ。若し訊かれたら

反物を買ひに行くと言へばいい」
（唱）二人は三ツ叉通りへ出て、若し叔父さんに逢つたらば、何と言ひわけしませうか。若し叔父さんに逢つたらば、仕立屋へ行くと言ひなさい。女の足も早いもの、いつしか小橋莊へ來て、二つの丸太の橋を眺め
「おやおや、橋が二つありますよ。まるでわたしどものために掛けたやうですね」
「さうかね」
「姉さん、あすこを御覽なさい。張郎橋（チャンランチヨオ）と書いてありますよ」
「お前は字が讀めるのかえ」
「ゑゝ黑い字は讀めませんが、白い字は讀めます」
「これは張家と唐家と持合ひで作つたのよ。だから張唐橋（チャンタンチヨオ）といふのよ。お前さん、先きへおいでなさい」
「ねえさん、嚇かしちやいやよ」
「オホン、オホン」
「あらいやだわ。ねえさんがオホン、オホンといふもんだから、わたしはとう〳〵嵌つて仕舞つたわ丸でゑほ蛙のやうだわね。さあ渡つて仕舞つたから、此橋に用は無い」
と丸太を取除けようとする。姉はよろ〳〵する。

「ねえさんが橋を渡るのを見ると、丸で白鼠が家移りするやうだわ」
と妹はホ、と笑ひこける。
「お前はよツぽど勝手者だよ、赤坊を生んでも年を取りたくない、といふのはお前のこツた。雀は雄に双向ふとさ、小さい者ほど猛烈だ」
とこんな冗談を言ひ乍ら二人は橋を渡る。
「これ〳〵一寸お待ちなさい。今度はわたしが先きへ行く」
と標札を見てゐたが
「こゝよ、こゝよ、水叉坊と書いてある奥の方でなんだか幽靈のやうな聲がするぢやないか。いやだね、地獄のお迎へが來たのぢやないかね。鬼伯伯（クイパツパ）、鬼太太（クイタイタイ）。どうぞしばらく待つて頂戴な。にいさんの病氣がなほつたら精進料理を拵へて上げますわ」
「ねえさんのお料理は定めておいしからう」
「お前のはやわらかだ」
男は床の中でウン〳〵呻つてゐた。姉妹は側に近寄つて
「お前さん、わたし達の來たのが分りますか」
「ウン、分るには分るが丸で二つの藥罐のやうに見える」
「馬鹿々々しい、わたしどもを人參の容れ物にしてゐやがる」

「ウン、人參はたつた一本しきやないが、もうスツカリ出枯らしだ」

姉の唱…姉は男の胸に手を當て、まあまあほんにおいとしい。初めて逢つた其時は、色は白くて福々しい立派なお方であつたのに、今は四月の菜の花と見違ふばかりに黄ばみ果て、熱や寒むけでほんやりし、脊は骨立つて稻の床、齒は亂杭と出ッ張つて、情けないお姿になりましたね。人に言へない話でもわたしの前では構はない。病氣のわけを聞かせて頂戴。

妹の唱…手を伸べて額を探ぐると、おやま、ほんとに呆れたよ。初めて逢つた其時は、正月の梅、二月のあんず、三月桃の花盛り、赤い中にも色白く、白い中にも色赤く、つや〳〵しい顏色も今は八月木犀の、匂ひも失せて黄ばみ果て、水に落ちた凧のやうに骨は露はれ脊は丸く、カマキリ同樣になりだね、お前の病氣は肩の凝り、脊なかの傷から來たのでせう。人に言へない話でもわたしの前では構はない。どうぞ打ちあけて頂戴な。

といふと男は首を振り

「いや肩も脊なかも悪くはない。わたしの病氣は麥田の中の鼈で、戸惑ひしたのが初まりだ。こないだ窓から逃げ出した時、池に嵌つてづぶ濡れになり、家に歸ると熱が出て、それからずつと寢込んだが、お袋の畜生、ひどいやつで、早く死ねかしとばかり、水叉坊に送り込み、湯水も飲めない此始末きのふ姉が來たので、親爺に訴へてやらうと思つたが、まあ〳〵お待ちよ、年寄に心配掛けるものではない。愈々となれば、棺桶の一つ位どうにかしてやるといふ話だ。そこで俺れも覺悟して今はのきわに一遍お前達に逢ひたいと思つたのさ」

「そりやあマア可愛さうに、早速醫者を喚んで上げませう。お前は誰れに見て貰ふ積りだえ」

「どうせ醫者に掛るなら四人の大先生だ」

「四人とは誰れと誰れ」

「第一は包先生、包送終。第二は江先生、扛上坟。第三は夏先生、下泥團。第四は福建の名醫台先生台老三」

（これは語呂に合せて藪醫者を罵つてゐるのである。第一の包先生は包送終といふ名で、病人を殺すのが請合ひといふ意味である。第二の江先生は扛上坟といふ名で、江と扛と同音。人間を墓場へ送込むといふ意、第三は夏と下と同音。下泥團は丸薬の代りに泥團子を飲ませるといふ意味ならん。第四台老三は好くわからぬが、これも無論悪口である。）

「未だほかにあるかえ」

「小東門（ショートンノン）の陸計康先生を喚んで來て呉れ。あの先生は内科は駄目だが、梅毒、癲病、かさが專門だ。それからもう一人、御殿醫者の陳蕙芳先生を喚んで來て呉れ。あの先生は死人の着物を燒くのが專門だ」

こんな事を言つてゐる中に、町廻りの藪醫者が鈴を振つて來た。姉妹は彼れを喚び込んで見て貰ふ藪醫者は男の脈を取つて無造作に藥箱を開けると、草根木皮が這入つてゐるので、そんなものは駄目

だといふ。これが駄目なら、名あつて實のない藥、と籔醫者先生しばらく考へてゐたが、
「うむ、あるある。白い頭の鴉と七十二の屁玉を煎じて飲めば治る」
「そんなものはありませんわ」
「無ければ此方の命はありませんよ」
「おやまあ、どうしよう」
「あるある。今年の草屋の上にある來年の霜」
「そんなものはありませんわ」
「無ければもう見込みはない」
「おやまあ、どうしよう」
「あるある、黄いろい狗の頭の上の角」
「曲つた鰭魚の兩方のあばら」
「石像の頭から出た赤い血」
「蠅の頭の上にある兩股」
「蜜蜂の陽物二斤半」
「石臼の下の黑髭黄」
「三歳の子供の水硬骨」

「お嬢さんの赤い股引の××××××」
「そんなものは決してありませんわ」
「無ければもう迚も見込みがありません」
「おやまあ、どうしよう」
「うむ、未だ一つある。蛙の毛と蟹の血を取つて、石臼の中に入れ、十七石の陰陽水を加へ、二搗半の燈芯草を焚いて猪口一杯になるまで煎じ詰め、それを飲むと屹度なほります」
「さういふものは此邊の藥屋に無さそうに思はれますから、どうぞ貴方の家から持つて來て下さいまし」
「あすこへは今、一寸行かれない。縛が内職してをるわ」
「そんなら一緒に行つて上げましよう」
姉妹は籔醫者と一緒に行つたが、まもなく歸つて、醫者の藥は無かつたから人參を買つて來たといふ。
「さうか、有難う」
「サア出來たから、おあがんなさい」
と妹は薦めた。
「おゝ大分元氣がついた。此調子では二三日内になほるかもしれない、なほつたら一つ、あすこへ行

かう」
と男は言ふ。
姉の唱…いえ〳〵行つてはいけません。
今夜お前は此處へ寢て、あしたスツカリ好くなつたら、お金をどつさり上げますから、床屋へ行つて髪をつみ、風呂屋へ行つて垢を去り、剩つたお金で着物を買ひ、四馬路をぶら〳〵散歩して、若し氣が向いたら灘黃(ダンワン)を、佛蘭西タウンでお聽きなさい。なるたけ早目に切り上げて、わたしの部屋にお いでなさい。
男は同じ唱を繰返へしてうたひ、妹の意向を訊く。
妹の唱…いえ〳〵わたしは放しません。ねえさんなんかと比ぶれば、わたしの方が金持だ。着物一枚何のその、お前があした治つたら、石路の町の中ほどに、大きな店を買つてやる、どんな着物も撰り取りだ。お前は今夜誰れ×××。
(石路は東京の柳原みたやうに古着屋の多い町。毛皮を縫ひ附けた關係で舊物を珍重する。)
男は今度妹の唱を繰返へしてうたひ、姉の意向を訊く。
姉の唱…お前は行くと言つたつて、わたしは放すもんですか。古着屋なんか何のその。質屋を出して上げますよ。お前はそこの番頭で、黃楊の算盤手に取つて、どんな着物も撰り取りだ。お前は今夜誰れ×××。

姉妹は互に競爭して質屋から銀行になり、銀行から鹽屋材木屋になり、眞珠屋、瑪瑙屋、阿片屋、人參屋と躍り上げ、妹は商賣などは面倒臭いと、曾國藩、李鴻章のやうに、赤い總付きの帽子をかぶせて、八人舁の大輿に乘せてやるといふ。姉は妹に負けてゐず、北京へ行つて清帝と相談し、位を讓り受け、かわゆい男を民國大總統にするといふので、男は遂に鏡を取つて自分の顏をよく見ると、色つやは一向好くなつてゐない。さうしてえたいのしれない吹出物が出てゐる。
こんなきたない旦那は、灘黃語りも唱ふのは御免だ。もうお罷めだ、歌を罷めて奥へ行つてお茶でも飲みませう。雙望郎の一節はこんなもので御座います。——雙望郎——
〔賣紅菱〕三月三日の清明節は凧揚げの日である。龍華鎭、薛家村の薛金春といふ惡太郎は、村一番の大凧を作つて揚げた。意匠といひ色合ひといひ、いかにも見事な出來映え。と自慢してゐるうち、忽ち强風にあほられて綱はふつりと切れた。あれよ〳〵といふ中に凧は龍華塔を掠めて隣村へ飛んで行き、范家村の桃園の中に落ちた。桃園の中には一人の美しい少女がゐた。これは范鳳英といふ女で早く父母を失ひ、叔父叔母に後見されてゐた。金春は少女の前に跪き、飛んだ粗相を致しました。お宅の屋根が壞れやしませんか。壞れたら左官を寄越して修繕させませう。と言つた。少女は笑つて
「いゝえ別に壞れたものはありませんが、花が少し散りました」
「では花代を辨償致しませう」
「花はどうせ時が來れば散ります」

と應えたので金春は嬉しく、只管詫び入つて凧を持つて出ようとすると、少女は引留め

「凧は表門から持つて出てもよう御座んすが、花は裏門から取りにおいでなさい」

と言つた。金春は此言葉がピンと胸に響いて晩になるのを待ち兼ねて范家の裏門に來た。少女は果して待つてゐた。さうして二人は遂に深い仲となつた。たびかさなるうちに叔父さんに感付かれた。

叔父さんは或晩二人の寢込みを襲つて

「不義者見付けた」

と叫んだ。金春は面喰らつて北の窓から飛び出すと、叔父さんは

「泥棒」

とおめき乍ら追ひ馳けて來た。

金春は天の一字を覺えるのに二年半かかり、地の一字を覺えるのに三年かかつた代物だが腕ッぷしときては中々强かつた。それはふだん撥沙袋や弄石燈で鍛え上げてゐたからである（いづれも力だめしの翫弄具）

金春は追付いて來る叔父さんを目蒐けて、おのれ何をと蹶飛ばすと、運悪くそれが急所に當つて、叔父さんは目を廻はした。泥棒の一聲に近處の者は喫驚りして馳せ集り、金春を取圍んだ。たつた一つの龍はいかに强くとも、地廻りの蛇にはかなはない。忽ち手取り足取り繩に括られてお役所に突出された。

時の上海知縣葉古人は、二度の試驗に及第した良千石であつたが、金春を拷問に掛け、口供を取つて時もあらふに五月五日端午の節句に重罪犯の豫審書を作つた。金春の母は田畑を賣り、泣く〳〵袖の下を送ると、さすが清廉の聞えある葉知縣も筆を曲げて三年の懲役に改め、金春を丹徒城へ送つた一年程經つうちに運よく大赦に遇ひ出獄を許されたが、故郷に歸つてみると、母親は病死して財產といへば塵ッ葉一つ殘らない。友達は見兼ねて何程かの金を醵めて、これをもとでに一苦勞して見ろと勸めた。そこで彼れは六月の炎天に土地の名物、蓮根と菱の實を仕入れてあちこちとふれ歩いた。

或日松江の北門外の茶館で一休みしてゐると、水雲林に上海から別嬪が來てゐるといふ話。金春はすぐに荷をかつぎ出し、水雲林へ來てみる、となるほど新建の立派な家があつて松や檜がこんもりと繁つてゐる。こりやあ商賣が出來さうだ。と一きわ聲を張り上げて「紅菱角（オンリンコ）」と叫んだ。

お部屋の中では一人の美人が針仕事をしてゐたが、「賣紅菱角（マイオンリンコ）」の聲を聞いて慌てゝ出て來た。見ると草の帽子をまぶかにかぶつて、身なりもサッパリした男が、若い菱の實と蓮根を天秤の兩端しにさけてゐる。

「ちよいと八百屋さん、その蓮根はいくらだえ」

「へえ、これは斜塘の本場物で御座いますから一斤が三十と六仙。菱は一斤十六仙。半斤が八仙。一仙で三ツで御座います」

女は笑つて掛目を見たが錢をやる時、男の手のひらを捻つた。男は驚いて見上げると、誰れあらう

その人は紛ふ方なき范鳳英であつた。

「おや〳〵貴方は」

「叱、叱、八百屋さん。こつちへ這入つてお茶でもお飲み。此熱いのにさぞまあつらいことだらう」

と女は金春を庭内に引入れた。

「まあおめづらしい。まさか此處で貴方に逢はふとは思ひませんでした」

「わたしもまさか貴郎が八百屋さんになつてゐようとは思はなかつた」

幸ひ其日は主人が外出してゐたので女中に鼻藥を吳れ、二人は打ち解けて話をした。女はあの時不義をしたといふ廉で親戚に財産を沒收され、松江に賣られて人の妾になつてゐたのである。

女は金春の苦役の話を聽くと眼に涙を浮べ。

「さうしてお前さんの家は今はどうなつてゐるの。子供衆でもあるのかえ」

「冗談言つちやいけません。女房が無いのに子供があるわけがありません。公事沙汰で財産を棒に振り、お袋には死なれ、何もかも無くなつて、たつた一人ぼつちになつて仕舞ひました」

「まあ可愛さうに」

「考へてみると凡がお庭に落ちたのが悪かつたのですね」

「本統にさうだわね」

と女は手筥の中から百兩ほどの金を出し

「これでお前さん早く女房を持つて身を固めて下さい。人は世嗣ぎを作るのが肝腎です。わたしもねえ、子供は無し、かうして人の妾になつてゐるのは、どんなにつらいでせうよ」と涙ぐんだ。

「では折角ですから遠慮なしに頂戴してゆきます。これで棺桶でも買ひませうよ」と男も涙ぐんだ。

女は慰め顔に

「清明節に墓參りにゆきますから、其時又逢ひませう。兎に角稼業をせい出して下さい。長いうちにはどうにかならないこともないでせう」

金春は金を貰つてそこ〳〵に暇を告げた。そうして清明節の來るのを樂しみにして働いた。

「賣紅菱角（マイホンリンコ）」

の聲も一きわ元氣づいて往來に響き渡つた。――賣紅菱――

蘇黃の歌詞には一種傳統的の調子がある、それは數え歌のやうなものと、問答體と、頓挫抑揚である。數え歌は、人の生ひ立ちを唱ふ場合には歳を以て數える。例令ば七歳詩書をそらんじ、八歳繪を學び、九歳刺繍を習ひ、十歳琴を彈き、十一箜篌を彈じ、十二機を織り十三嫁に行くなどである。これは古樂府から傳統されたもので漢末焦仲卿夫妻の心中歌「孔雀東南飛」などが初まりであらう。前例「望雙郎」の姉娘の述懐「二年間はお母さんが抱きどほし」云々は同型である。又時候の方面では正月は梅の花、と先づ冠を置き其下に或る出來事を叙べ、二月は杏子の花、三月は桃の花、と十二月

まで一々冠を置く。これは童謡、小唄によくある型で、「望双郎」の妹の唱「三月桃の花盛り、赤い中にも色白く」はその調子を取つたものである。又問答體の方では「望双郎」の鍼醫者が口から出任せの藥名を言ふ。わたしは省略して藥名だけ並べたが、原文には初じめ三回の問答と同じ型が十回まで繰返される。一體簡單な曲は幾度も繰返へすうちに音樂上の面白味が出るので、節調を聽かせるために歌詞の重複を厭はないのである。故に出鱈目の問答をなるべく長く續ける。その終りの方にある問答は、女の言つた言葉を男がそのまゝ取つて繰返へし、古着屋から質屋、質屋から銀行、とだん〳〵驛り上げて、遂に曾國藩、李鴻章となり、民國大總統で畢る。これは驛り上げ體の問答歌で、吹腔「小放牛」の問答歌とはちがふ。小放牛の問答歌は話本の參講の變化であらう。

頓挫抑揚は明代小説によくある型で「是れ別人ならず、何々縣で音に名高き誰れそれ」といふ口振りである「望双郎」の「色男の病氣を知らずにゐればそれまでだが一旦知つた上はそのまゝにしては置けない」とか「父母は三男四女を生まなかつたが、わたし達姉妹二人だけ生んだ」といふのはそれである。殊に滑稽なのは、色男が逃げ出す時は必ず北の窓。娘を口説く時には必ず兩脚饅頭跪來浪、（兩膝をついて）といつてゐる。これは勿論支那家屋の構造と情慾のために女に降服する滑稽味を見せてゐるのであるが、前の頓挫抑揚と共に節調に捉られてゐる點が少くない。

尙ほ又灘黄の歌詞は、全部七言句で綴られ蘇州語を用ゐてゐる「望双郎」の歌詞は隨分思ひ切つた馬鹿なものであるが、實演を見ると可成り面白い、これには三つほど極まり切つた演藝上の形式がある。先づ一人が述懐及來歴を述べ、次に相手となる者が一人現はれ、滑稽な問答を始じめ、それから道行となり、目的地に達し、更に一人或は二人を增すのであるが、通例四人以上、場面に上ることは無い。さうして述懐、問答、道行を重ねて畢るのである。（右は必ずしも人數が殖えるわけではない。上海灘黄の如きは生粹の口演式で、最初から一坐皆出揃ひ、彈手は勿論、唱手も坐席を離れない。）

徐氏の講話

灘黄の起りは支那の劇場が茶園と改稱する時よりも少し前に始まつたのである。それは清朝の全盛期で現在の徽班京班が未だ行はれない前で、芝居といへば崑曲に限れた時代である。其時或る皇帝が崩御して劇場は大打擊を受けた。專制時代の芝居はふだんでも、皇室の忌日が來れば其日は必ず休業する。況して皇帝が死んだとあれば御布れが出ると同時に全國の芝居小屋は一齊に休場しなければならぬ。諒闇三年の間は鳴物は一切御法度で芝居は勿論宴會の餘興さへ禁止される。死んだ皇帝の御威勢が行き渡るほど活きた人民の活計が立たなくなつた。子供の中から飯を食ふために藝を習つたものは興行を差留められては暮しが出來ないけれど、お上みは彼等の生計の事など考へずに食ひ扶持も當てがはずに只差留める丈けだ。

當時崑曲の本場は蘇州であつたが、そこに鏡といふ男があつて苦し紛れに一つの逃げ路を案出した

それは崑曲に用ゆる耳障りの樂器（銅鑼太鼓笛など）を抜き取つて靜かな絃物（胡弓琵琶）ばかり用ひて歌を唱ひ表看板を脱して芝居でないといふことにした。又一方には同樣の手段でお座敷の餘興を演じてかつ〳〵の身過ぎをした。樂器を耗らしたので、歌も簡單になつた。さうして專ら絃ものを用ゆる灘黄といふ新しい名前が出來た。灘黄は右のように清朝諒闇中の產物であつたが、これが人民の一つの經驗となり、のち〳〵幾人も皇帝が死んで芝居小屋を開けることが出來ない時、戲園を茶戲と改稱し、表面はお茶を飲む所といふことにして芝居を演じた。此茶園の名稱は革命頃まで行はれ、今でも田舍では芝居のことを矢張り茶園といつてゐる。これは清朝の逝ける天子樣の御威勢の遺り物である。

灘黄は以上の如く鍍といふ人が發明して鍍灘と稱せられたが、のち〳〵正劇の完りに一二の滑稽小劇を添へた。（能に對する狂言の如し、現在の灘黄はその小劇の變化せるもの）そこで鍍灘を前灘と誤稱し、小劇を後灘と稱した。

灘黄に急場の飯の種として案出したものだから充分の練磨を經てゐない。只手ツ取り早く簡單に片附けて仕舞ふのが趣意で、脚本は崑曲をそのまゝ用ゐ、面倒な節を悉く省いてお茶漬のようにして仕舞つたのである。崑曲一齣を學ぶには少くも一個月ほどかかるが、灘黄一齣は僅か三四日で濟む。大勢の命を救ふための藝術はかういふ風に簡單でなければならぬ。

前にも言つた通り、灘黄は崑曲から出たので、其輪廓は少しも變りはないが、只むづかしい處を思ひ切つて省いた。崑曲中の「白」「引」「曲」が灘黄に改造された時、說白は全部踏襲し、引は極めて簡易に片附け、曲は大いに變更した。崑曲はそれ〳〵本歌の譜があつて練習の功を積まなければ唱へるものではないが、灘黄はそんな億劫なものではない。僅かに四句の節に限られてゐるから、一度此四句の節を覺え込むと、どんなものにも應用することが出來る。尤も未だ外に特別の調子がないでも樣に唱ひ、齣々の色分けがない。

灘黄は皆七字一句である。その基本の調子は四句中におさまつてゐるので、丁度七言絕句を際限なく並べたようなものである。七言絕句は平起と仄起とある。灘黄にも亦平起と仄起とある。故に灘黄の調子は七言絕句の朗誦と大いに關係がある。今左に二首の七絕詩を擧げる。（日本人はこれを棒讀みに音讀すると理解し易い）

少小離家老大回　鄉音無改鬢毛衰
兒童相見不相識　笑問客從何處來
青山隱隱山超超　秋盡江南草木凋
二十四橋明月夜　玉人何處敎吹簫

以上の中、第一首は仄起、第二首は平起である。われ〳〵が此二首を朗誦する時、句中の•に當る文字を引延ばして讀むと調子が取れる。此引延ばす文字は皆平聲である。灘黄の唱句も同樣で、句毎に一字或は二字引延ばす、此引延ばす字は必ず平聲であつて、誦詩と同じ抑揚頓挫である。故に此四句の唱ひ方さへ出來れば、あとは字句を覺えるだけで、どんな段物でも唱ひこなせるのである。唱法を練習するには本を見るには及ばない。先づ構はず唱法を練習し、口馴れて仕舞へば、どの段でも破竹の勢ひで卒業する。京劇を學ぶ人は先づ

「啼個啼個啼個啼」

と言ひ續ける、灘黄を學ぶ者は單に

「啥個啥個啥個啥」

でいいのである。（此要訣は實に好く穿つてゐる。一は北京語で京劇の癖を現し、一つ蘇州語で灘黄の癖を見せ、いづれも此の如く簡單であることを罵つてゐる。啼個はティコ。啥個はサカ）

此七字には四つの唱ひ方がある。

啥個啥個•啥個啥　啥個•啥個啥個•啥

啥個•啥個啥個•啥　啥個啥個•啥個啥

これは前の絶詩と同樣で•に當る所の字を引延ばして唱ふ。即ち四句の基本調子である。此形は仄起であるから今若し前の二句を取つて後の二句に繋ぐと平起の七言絶句と同じものになる。凡て•に當る字は平聲で讀めば間違ひはない。上下の句の分け方は京劇と大差無し（七字を二二三に分けて讀む）

基本調子は尤も多く用ゐられるが、此外いろ〳〵の雜調がある。「借茶」の如きは基本調子ばかりを用ゐてゐるが「出獵」中の老土地（道祖神）の如きは偶々幾句の雜調を交じへてゐる。又「下山」「勸妝」の如きは一段中にいろいろの雜調が含んでゐて、これを五毒戯といつてゐる。其外普通の唱法を用ゆる中に最初の三四字だけ崑曲を用ゆるものがある。これを曲頭といふ。

灘黄の脚本は前には抄本ばかりで印刷本は無かつた。彼等は文字を識らないので書き違ひが多く、誤りから又誤りを生じて數十年後には全く意味をなさないものになつた。三十年前、露店に石版の灘黄本を賣つてゐた。これは上海で出版したもので、皆で十齣ほどあつたが、中一齣は後灘本らしく思はれた。其後蘇州で又上海出版の鉛版本を三十三冊手に入れた。一冊一齣讀切で其中に一二齣の後灘があつた。其外糸竹の音譜一冊、鑼鼓の音譜一冊あつた。これを見ても當時上海の灘黄は前灘を主としてゐたのである。後灘をもてはやすのは近來のことである。

以上二種の印刷本は文句が俗惡でないから恐らく最初の原本であらふ。或は有識者が訂正したものかもしれない。兎に角、上品である。だが抄本と來ては全くひどいもので、自分は曾て「出獵」の抄

本をみたが、李三娘の歌の首じめに

旭日當空日轉西、
李氏三娘日慘慘、

とある。僅か二句の間に三つの日の字を使つてゐるさへ論外だが、第一句の如きに至つては殆んど意味をなさない。それでも彼等はかういふ風に唱ひ慣されてゐるから仕方がない。

灘黄の樂器は餘り數が多くない。太鼓、調板の外に胡琴二つ、琵琶一つ、笙一つを用ゐ、時としては琵琶の代りに三絃を用ゆ。笛は常住用ゐない。只調子を整へるために曲の初めに一寸一吹きするだけである。笛を多く用ゆるやうになつたのは上海が初まりである。上海の聽客は概して强い刺激を求めむやみに派手な騷々しいことを好む。蘇州では唱聲が樂器より高く上海では樂器が唱聲より高い。

灘黄の序開きには必ず絲竹合奏の「四合如意」といふ曲を演奏する。彼等の仲間はこれを橋と言つてゐる。ときたまこれを聞くと非常に面白く感ずるが、度々聽くといや氣がさす。

崑曲は十種の役柄を用ゐてゐるが、灘黄はこれを省略して四種の役柄にした。

役柄
- 陰 ― 旦（女形）
- 陽
  - 老生（立役）
  - 小生（二枚目）
  - 丑（三枚目）

此四いろの役柄の中で旦（女形）は凡べて細聲を用ゆるのみで、正旦（正しき婦人）貼旦（腰元）花旦（派手な女）等の區別がない。

老生（立役）も亦淨（敵役）正生（善人役）老生（ふけ役）などを包括して一人でいろんな人物を兼ねる。

小生は色男役である。崑曲では小生（子役）紗帽生（文人）雉尾生（武人）などに分けてゐるが、灘黄では皆一樣に細聲を出す濡事師である。

丑角（端敵）は崑曲は白面、二面、小面などに分けてゐるが、灘黄は皆兼任で、老旦（ふけやま）まで擔任する。崑曲では一つの場面に同じ種類の役者が二人出ることはないが、灘黄には制限がない。

灘黄丈けでは暮しが立ち兼ねて、これを本職とする者はない。彼等の本職はたいてい日中の手仕事で、夜になると暇になるから、お座敷の餘興を引受けて幾らかの錢を儲けるのである。値段も決して高くはない。若し知り合ひの仲なれば、お酒の一杯も飲ませれば大いに滿足して報酬を取らない。彼

等は專業でないから道樂氣分がある。わたしが十幾歳の時分、蘇州では娯樂機關がないので若い者が六七人集まつて一人の師匠をやとひ、夜になると灘黃の稽古をする。授業料は極めて安いもので、毎晩一人が二十文、胡弓を兼ねて習ふ者はその倍額であつた。もちろん今はそんな安いことはあるまい。

さうして二三個月經つと、十幾段も歌の數を上げて、日を定めてお浚らひするのである。此時大勢の見物人を集めて、各々役割を定め、自慢のノドを聞かせる、時によると師匠は幾人かの先輩を一座に請じ、唱や嘩しの助太刀をして貰ふこともある。此日弟子達はめい〳〵割前を出して一テーブル或は二テーブルの料理を備へて御馳走する。何しろ道樂息子の娯みであるから、一時は熱心になるが、結局尻切蜻蛉になつて仕舞ふ。若し三年ほど眞劍に勉强したら立派な玄人になれる。

蘇州と上海は距離が近い上に、灘黃は皆蘇州人が唱つてゐるのだから、蘇灘と本灘との區別をつける必要があるわけはないが、のち〳〵林步青といふ天才が上海から現れたので、海派蘇灘といふ特別の者が出來た。林步青は本來それで御飯を食べてる人間ではないが好きこそ物の上手なれで、一圖に斯の道に走つて仕舞つた。彼れの天才は日々の見聞を採つて一段の唱を組立てることが出來た。彼等はこれを賦と稱した。彼れの機智はどんな有觸れた出來事でも立所に歌にして仕舞つた。半時間前の人の失策は、半時間後の彼れの名曲となつた。想へば十何年前、上海で夜花園（納凉演藝場）が流行つた時、彼れは或る夜花園の中で灘黃を唱つてゐたが、折柄一人の遊客が誤つて池の中に落ちた。林步青はすぐに其有樣を歌の中に加へて聽衆を笑はせた。

彼れはこのやうな天才を以て多くの人に歡迎された。彼れの長所に依つて、賦を作り賦を唱ひ、一切の新しいことを賦の中に受入れたが、これを劇（崑曲から取つた灘黃の脚本）の中に挿入することは困難であつた。

前灘は、いづれも來歷のある劇で無暗に加入することが出來ない。後灘もその幾齣は、構造が完全してゐるので濫りに增減することが出來ない。そこで「賣橄欖」「馬浪蕩」が彼等の大本營となつた。此二曲はもと〳〵筋のないもので何を入れても差支へなかつた。故に彼れの得意の賦は大概此中に這入つてゐる。林步青の賦が一たび世間に歡迎されると「賣橄欖」と「馬浪蕩」は彼れのお藝で、忽ち五光十色の光彩を放つた。それから海派蘇灘、後灘の勢力が前灘を壓倒した。

いい脚本は澤山あるが一般向きとして左のやうなものを擇んだ。

（旦戲）蘆林、潑水、斷橋、戲叔
（老生戲）山亭、掃秦、勸農、逼休
（小生戲）玩箋、錯夢、當巾、受吐
（丑戲）下山、招串、端陽、遊殿

旦戯は女形が主になつて活動するもの、老生戯は老生が主となるもの、以下これに準ず。其外いろいろの役者が各々特色を現はして甚だ賑やかなものがある。

合鉢、賞荷、出獵、秋江、鬧齋などそれである。

以上に列擧したものはほんの一例であつて、前灘の精華はこれに盡きるものではないが、先づこれだけ見れば標準が立つ。

後灘……の中にもいい脚本が隨分ある。「賣橄欖」のやうな附屬品が活動するものばかりが後灘ではない。此種のものは女子供にわかり易いから自然歡迎されるのである。われ〳〵が文藝的眼光を以て灘黄を見ると、前灘はいふまでもないが、後灘の中にもいいのがある。

借靴、看燈、分家、遊觀、賈璟、青炭、連陞店、探親、後壽（右の內遊觀は三つの親戚緣者が蘇州の玄妙觀（淺草觀音のやうな盛り場）に遊ぶ場面で三種の唱ひ分けあり、拆字（うらなひ）判斷の處が尤も面白い。賈璟は附屬品極めて多く甚だ唱いにくひが賦よりもましである。青炭は賣草囤、捉拉扱、賣橄欖などと類似のものであるが、中でこれが一番いい。連陞店と探親は京劇と同じ。後壽は明の權臣嚴嵩の誕生祝を叙べたもので前壽、後壽の二種あり）

以上の後灘は皆面白いものである。前灘をきいてわからぬ時には、此種の後灘を味はつてみるがいい。

右は徐傅霖氏の灘黄に關する講話である。徐氏の擧げられた灘黄の脚本は、たいてい二字題であるから、崑曲を踏襲せるもの、或は脫胎して間もなきものならん。崑曲は文人の才筆になつた貴族文學でその文藝價値はいふまでもないが、眞の民間藝術としては、寧ろ後灘以後の所謂墮落期の灘黄を見なければなるまいと思ふ。崑曲を踏襲した前灘は店先きを借りて商賣をしてゐるやうなものである。未だ獨立の域に達してゐない。彼等は一見高尙な店構へではあるが奥行がない。家主に厄介になつてゐるので民衆の胸の內を唱つてゐないのである。然るに後灘以後の灘黄（タンワン）は、崑曲から游離したその簡單の曲に、粗野な題材を當て嵌め、拙劣ではあるが、下層民の胸中を赤裸々に唱つたものである。故にわたしは「望雙郎」「賣紅菱」のやうなものを擇んで最初に紹介したわけである。

灘黄（タンワン）は今芽生えである。其曲も其歌詞も極めて幼稚な野卑なものである。けれど將來民衆の趣味が向上すれば灘黄も向上するわけで、わたしは現在の灘黄から其下世話趣味を見出して滿足してゐるのである。故にそれを寄席の中から特に引き出したのである。

賣　卷

賣卷は說經節である。これは僧侶や道士が初じめ法事の禮讃として用ゐたものであるが、後ちには

鐘太鼓の外に管絃などを加へて節面白く唱ひ囃し、一種の餘興になつて仕舞つた。但し寄席には出ないが家庭に招かれてゆく。

寶卷は前にも述べた通り、佛典の偈を獨立させたものである。佛典は教理を記憶させるため、先づ散文で佛の功德を說き、次に韻文で同樣のことを唱つた。此形は觀音經、父母重恩經などにあるが、唐末五代に至つて口語體を用ゐ、更に俗耳に入り易くするため、故事を支那に取り、人物、場所も悉く支那に改めた。其唱ひ方も隋唐以來輸入された西域調（卽ち印度調）に依つたものであらう。寶卷は間もなく道士の手に移り、呂洞賓その他八仙人の神通力を示し、或は儒學風の敎訓を交じへたものもある。現在道士の唱ふものは、內容が非常に小說化し、女子供は講談、琵琶歌同樣の興味を以てこれを迎へる。これは彈詞（琴琶歌）鼓詞（太鼓歌）戲曲などと相互的關係があつて、取材も形式も同樣の物が多い。鄭振鐸氏は「中國文學研究」の中に佛曲叙錄と題し、寶卷の目錄說明書を作つた。中に燉煌の發掘物六種を載せてあるが、皆佛典の飜譯らしい。その外民間に流行せる寶卷三十六種を載せてあるが、寶卷はこれのみではない。何百何種とあるのだから他日稿を續ぐそうである。わたしはその中で有名なものを二三摘記して寶卷の內容を示さう。

〔香山寶卷〕

寶卷の中でもこれは尤も古く尤も有名なものである。言傳へに據ると、宋の普明禪師が崇寧二年（西紀一一〇三）八月十五日杭州の上天竺で神の感示を受けて作つたものだそうである。一名、觀世音菩薩本行經簡集と稱し、全編二卷、上海文益書局、民國三年出版の石印本である。別に咸豐壬子、上海翼化堂發行の觀音濟度本願眞經あり。これは前者を觀音自身の自叙體に改作したもので、內容も結構も殆んど大差無し。

迦葉佛の時、須彌山の西に興林といふ國があつた。その國の人皇を婆伽といひ、年號を妙莊と稱した。人民は安樂に國は豐かであつたが、只一つ太子の無いのを苦にやんだ。皇后寶德は旣に二人の皇女を生んで妙書、妙音となづけたが、妙莊（年號）十八年十九日、又もや一人の皇女を生んで名を妙善となづけた。此皇女は尋常人ではなく仙女の生れ變りであつた。いつしか妙善は十九歲になつたが、いつも上天に向つて祈り、皇宮を捨て出家奉佛を願つた。宮女等は彼女の修業振りを見て皆笑つた。或日皇帝は朝廷に出られたが、太子のないことを思ひ浮べると鬱がずにはゐられない。群臣等は皇帝の只ならぬみけしきを見て跪いて奏した。「皇女樣はお三方とも、もはや妙齡に達せられましたから、適當の聟君を召してお世嗣としたら如何で御座いませう」皇帝は此申出を容れて三人の皇女に婿を召された。そこで第一の皇女は一人の文人をお取りになり、第二の皇女は一人の武將をお取りになつたが、第三の皇女はひたすら修業の道に志して婿取を拒んだ。皇帝はこれをきくと大層な御立腹ですぐに彼女を後園に監禁した。彼女は却て喜んだ。鳥が籠を出たやうに、囚人が枷を脫したやうに、

宮中の生活を離れて自由自在の身になつたのを喜んだ。さうとは知らず皇后は第三皇女を思念され、一個月の後ち皇帝に向つて切に赦罪を請うた。皇帝はそこで皇后と二人の皇女と宮女等に申付け、妙善を説得させたが、彼女は何と言つてもきき入れない、半年の後ちには遂に後園を抜け出して白雀寺に入つた。皇帝は慌てゝ尼僧を喚び出し、彼女を宮中に歸へすやう取計らへ、さらずば寺を燒き拂ひ尼を滅すと嚴命した。尼は驚いて引きさがり、あらゆる難題を持ち掛けて追ひ出さうとしたが、彼女はいかなる苦痛をも忍んで、手の着けやうがなく、ぜひなく此由を覆奏すると、皇帝は大怒遊ばされ、すぐに兵を遣はして寺に火をつけた。彼女はさわがず身を刺して血を噴き上げ、くれなゐの雨を降らせて火を消し止め寺庵を全うせしめたので、皇帝の怒り益々甚しく、再び兵を遣はして彼女を召取り都に引き來りて斬罪に處したが、斬つても斬つても彼女は死なない。けれど彼女は父君の煩悶を痛ましく思ひ、自ら天に禱つて死をねがひ弓弦を以て吭を縊つた。此時山崩れ樹倒れ海乾き河竭き、天地晦冥、日月光無く、此國の人も他の國の人も悲嘆に暮れぬ者はない。折柄一つの虎が現はれ彼女の屍を啣へて深林に運び去つた、かと思ふと彼女の魂は地府に遊び、其本願の慈悲心を以て多くの惡鬼を濟度し超生せしめたので、地獄は忽ちガラ空きになり、閻魔王は狼狽して彼女を此世に送り歸した。此世に歸つた彼女は獨り林の中で、泣き悲しんでゐると、太白金星のお示しがあつて、香山の懸岩洞に到着し、其中で九年の刼を積み成道して觀世音となづけられた。此時玉帝は興林國の毀佛滅法をみそなはし、神勅を下して瘟部行病使者を遣はし、病の種を彼國に送つた。妙莊皇帝は忽ち不治の難症に罹り苦痛に堪え兼ねた。香山皇女は既に此事を知つてゐたので、すぐに僧人に化身して彼れを救ひに行き、不嗔人の手眼に靈丹を交ぜて飲めば病ひ癒ゆべしと說き、其不嗔人の手眼は香山の懸岩洞に求めよと敎えたので、皇帝は使者を差し出したところ、果して彼女の手眼を獲て病を癒やした。皇帝と皇后はみづから香山に行つて謝恩すると、手眼を捨てた仙女は圖らずも己れの娘であつた。皇帝は驚いて、手眼の再生を祈願した。果して皇女の手眼は再生した。於是妙莊皇帝と皇后と宮妃等は皆行ひを改め道を修め佛法を崇信したので、淨土に歸することを得た。

〔梁山伯寶卷〕

これは上海文益書局石印の二卷本である。

或年の七夕に天上の牛郎（ひこぼし）と織女（おりひめ）が忽ち凡念を起したので、玉帝は大怒遊ばされ、彼等の罪を責めて凡界に貶した。そこで牛郎は梁家に生れ變つて梁山伯となり、織女は祝家に生れ變つて祝英台となつた。梁山伯が十八で祝英台が十六の時、杭州に一つの學塾が開かれたので、山伯はそこへ行つて勉强しようと思つた。英台も亦男裝して入學したいと思つた。英台の嫂は女の學問を譏つたが、彼女は構はず出掛けた。二人は途中で行き遇つて義兄弟の約束をした。三年の間二人は勉强して一つ床で起き伏しした。英台はどこまでも我が身の女であることを隱してゐた。山伯は或る機會にうす〳〵感付い

たが、英台は體よく胡麻化した。けれど終まひにとう〳〵嚇し切れなくなつた、英台は書塾を辭して家に歸つた。別れる時、英台は先生の奥さんにまことを打ち開け、山伯と夫婦になりたいから、彼女の家に結婚の申込ませるやうに勸めて吳れと賴んだ。さうとは知らず山伯は、或る所まで英台を送り出した。彼女はみち〳〵山伯に我が身の女であることをほのめかしたが、山伯の靈魂はその時太白金星に召し上げられてゐたので情が動かなくなり、彼女の挑發的の言葉が少しも分からなかつた。英台は彼れと別れて家に歸ると、父母はすでに彼女を馬天榮の子、馬文才に許した。彼女は泣いてこれを拒み死なうとしたが死に切れなかつた。一方山伯は先生の奥さんから英台の意のあることをきいて、急いで祝家に馳け付けたが、もう遲かつた。英台は彼れに一切の事を打ち開けた。彼れは失望して家に歸つた。家に歸ると重い病氣に罹つて幾日もたゝぬうちに彼は死んで仕舞つた。此報をきき傳へた英台も氣絶したが、丁度その日は吉日に當つて馬家から迎への轎を寄越した。英台はせめて山伯の墓參をして行きたいといふので、父母はゆるした。英台は喪服を着て山伯の墓所に行き、泣いて拜んだ。拜んで又泣いた。すると忽ち山伯の靈が現はれ、墓を裂きひらいて英台をその中へ突込んだ。英台のからだが中へ這入ると墓はもとのようにつなぎ合つた。女中どもはあわてゝ引留めたが間に合はず、彼女の裙(はかま)だけ手に殘つた。折も折とて婿の馬文才は急死した。彼れは死ぬとすぐにあの世の役所に行つて山伯が彼れの妻を奪つたことを訴え出た。閻王は前因後果を說き示し、彼等は胡蝶となつて天上に行くものだと、告げ知らせたので、馬文才は何もかもすつかり分つて、魂が元の身に歸り、再び此世の人となつた。彼れの父は此話をきいて不審を起し、使をやつて山伯の塚を開いてみると果して二人の屍體はなかつた。只二つの胡蝶か墓穴からひらひらと出て、中天高く飛び去つた。

〔白蛇寶卷〕

上海文益書局石印二卷本。

宋の眞宗の時、峨媚山中に一つの白蛇があつて一千七百餘年の間修錬した。或時の蟠桃大會に觀音菩薩は彼女を携帶して席に臨んだ。ところが西池金母娘々が白蛇の機緣を道破し「凡そ仙たる者は必ず恩を酬る德を報じてこそ仙班に列すべし。汝の恩人は一千七百年前に汝の性命を救ひしが、現世は杭州に在つて、姓を許、名を漢文といふ、汝は彼に報答をすまして後ち會に臨むべし」と說いた。そこで白氏は卽刻杭州に赴き、青蛇を取入れて婢となし、名を小青となづけた。のち〳〵果して許漢文に逢つた。許漢文は其時の名を許宣といつてゐたが傘を貸したのが緣となつて彼れと婚約した。ところが白氏は官庫の中の元寶を盜つて彼れにやつたので、それがため彼は罪を受け、軍隊の戍卒に編入されて蘇州に行つた。白氏主從は跡追ひかけて蘇州に行き許宣を救ひ出して夫婦となつた。或年の端午節に白氏は雄黃酒を飲み過ぎて現形をあらはし、許宣を嚇し殺した。白氏はあらゆる危險を冒して南極宮中の仙草を盜んで許宣を救つた。途中鶴童に追はれて危く命を失はふとした。それから一時

安全の暮しをした。或晩白氏は小青と共に三百擔の白檀木を盗んで來た。持主は失望して江に投じて自殺を計つたが、金山寺の僧、法海に救はれた。法海は白蛇の仕業と見て取つたので許家に來り、佛像製作の料にとて白檀木の寄附を求めた。許宣は依頼に應じて全部の白檀を法海に喜捨した。佛像が出來上ると許宣はこつそり家を拔け出して寺に行つた。法海は彼を止めて懸まつた。白氏は小青と共に寺に追ひ行き、許宣を返へして呉れと迫つたが、法海は勝手にしろと言つて取合はない。彼女は已むなく神通力を以て洪水を起し、金山寺を水攻めにしたが、結局法海の法力に敵しかね、杭州へ逃げ延びた。法海は許宣の悪縁が未だ盡きないのを見て、彼れを斷橋に送り白氏に會はせた。まもなく白氏は一子を生んだが、生み畢るとすぐに法海は、彼女を調伏して雷峯塔の下に鎭壓した。白氏の生んだ子は夢蛟といひ、のち〳〵狀元に級第し、墓參のため雷峯塔に來て見ると、端しなくも法海とめぐりあひ母の仇きを打たうとする。法海は今度は却て白氏を釋放し、彼女と共におの〳〵祥雲に駕して空中遙かに消え失せた。許宣は剃度して僧となり正果を遂げた。

〔孟姜女寶卷〕

本書は雲山風月主人編輯と題し、上海翼化堂出版の壬子年本と、上海文益書局出版の石印本の二種あり。文句は多少の相違あるも全體の趣好は同じ。寶卷に於ける孟姜女の故事は民謠及び傳說に於けるものと大分の相違がある。孟姜女故事の研究は顧頡剛が雜誌現代評論に於て發表した。

秦の始皇が人間を統治した時、阿房宮を作り長城を築き無道の行ひが多かつた。或日、丁度その日が天宮の冬至節に當つたので、もろ〳〵の仙人は皆朝賀に出た。中に一人芒童といふ仙官が、ふと下界を見下ろすと、汚穢の氣が天に沖してゐるので、大心願を起し、下界へ行つて萬民の難を解き救はふと思ひ、仙姫宮の第七仙姑に此事を話すと、七仙姑は餘計なことに手出しをするものではない、と諌めたが彼れは肯かず、其場からすぐに下界に下り、蘇州へ行つて人間の身體を借りて生れ、名を萬喜良と稱した。これを知つた仙姑は放つても置けないので、彼女も亦人界に下つて大冬瓜の中に身をひそめた。まもなく此土地の妻婆と孟員外は冬瓜に目をつけ、二つに剖いてみると中から美しい女の兒が出たので互に取合ひを初め、二人は遂に役所へ訴え出たので、縣主の裁きで其赤兒を孟姜兩家の者とした。さうした緣故で彼女は孟妻女と呼ばれた。

玉帝は其日二仙が出奔の事を聞こし召され、御機嫌よろしからず、いつそ彼等の身を犧牲にして救民の大事を遂げさせんと思し召され、すぐに太白金星を人界に遣はし、一つの童謠を流行らせた。

姑蘇にあるてふ萬喜良
よろづの民の命の親

死んで長城の王と仰がれ
萬里の城は常盤の如し

此童謡が始皇の耳に入ると、始皇は賞を懸けて萬喜良の召捕方を命じた。萬喜良はぜひなく家を離れて難を避けたが、或日蘇州に歸つて孟員外の花園に入ると、折柄池の中に苦しんでゐる一人の女があるので急いで救ひ出すと、それは同家の令嬢孟姜女であつた。彼女は花園に遊んでゐる中、誤つて水に溺れ掛つたのである。孟員外は大いに喜び其場で娘を彼れに許した。丁度結婚の日、追手が着いて喜良は召捕られた。召捕られた彼れは長城に送られ、萬民の身代りとなつて生きながら城の下に埋められた。始皇は彼れを長城萬里侯に封じた。

孟家ではそんなこととは夢にも知らず、だん〳〵寒くなつて來たので、孟姜女は彼れの冬着を作り、自ら長城へ持つて行かうとする矢先き、喜良は彼女の夢に現はれ、事の次第を告げたので彼女はすぐに身を起し、遙々萬里の城まで行つて泣き崩れると、城の中から喜良の骨が露出した。始皇は孟姜女の美貌を悦ばれ、宮中に召されたが、彼女は三つの條件を持ち出した。一つは喜良のために立派な墓を作る事、二つは萬王廟を建てる事、三つは喜良の墓に始皇が親祭さるゝ事であつたが、始皇は一々これを許された。墓も廟も出來上つて祭禮の日、始皇は親臨した。山のやうに積み上げられた靈前の紙錠は、壯厳の儀式の下に火を點ぜられ、ぽつぽつと燃ゆる炎は、天地も焦がさんばかりの只中

へ、彼女は急に身を投じた。

そこで芒童と仙姑はやうやく玉帝の許しを得て、元の神位に就くことが出來た。同時に孟姜兩家の父母は超度されて仙人となつた。

〔何仙姑寶卷〕

一名呂祖師度何仙姑因果卷といふ。二卷物、上海翼化堂刊行。

呂岩、字は洞賓、彼れは一つの仙人組合を取締つてゐたが、或日ふと想ひ出してみると、上八洞、下八洞の仙人組合の中に、各一人の女仙人があつて（それは驪山の老母及び麻姑を指す）彼等の組は西王母のお祝ひ酒によばれてゆくのに甚だ都合がいい。ところで呂洞賓の仲間には女仙人がない。そこでどうしても下界へ行つて、女仙人を一人引上げて來なければならない、と思つたので先づ杭州へ行つてみると、忽ち一すぢの白光が虚空を支へて光り、行手を塞いでゐるので、彼れは雲をひらいて見ると、一人の女が念佛修行に餘念ない樣子、そこで彼れは雲水の道士となつて彼女を試るべく出發した。彼女は何といふ姓を名乘る或る藥種屋の娘であつたが、父母が彼女に修道をゆるさないので、少からぬ困難を感じながら、兎に角熱心に修業しつゝあつた。呂洞賓は度々彼女を試みたが、その道念の固いのに感心し、遂に拔擢して連れ歸る。時に彼女の師兄なる黄龍といふ道士が、雲に駕して追

ひ來り、彼女を取返へそうとする。そこで黄龍と邑澗寅との間に一大格闘が始まつて、黄龍は危く滅亡するところであつたが、幸ひ觀音大士の救ひに依て性命を取留めた。

版權所有

昭和十三年九月十七日印刷
昭和十三年九月二十日發行

中華萬華鏡
定價壹圓八拾錢
（長谷部製本）

著者　井上紅梅
發行者　山本三生　東京市芝區新橋七丁目十二番地
印刷者　森島金治郎　東京市麻布區宮村町七十八番地
（開友堂森島印刷所）

發兌　改造社
東京市芝區新橋七丁目十二番地
振替東京八四〇二番
電話芝（43）一一二一—四番

22495

760
170